

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 64

Mar. 9, 2009

■会長: 赤野 一郎  
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内  
■TEL: 03-5399-7372 ■振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [yamazaki@ic.daito.ac.jp](mailto:yamazaki@ic.daito.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 33 回大会のご案内

英語コーパス学会第 33 回大会は、4 月 25 日 (土)、神戸大学 (〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 <http://www.kobe-u.ac.jp>) で開催されます。会場となる国際文化学研究所(鶴甲第 1)キャンパスは、JR 神戸線六甲道駅下車、神戸市営バスに乗り換えて約 10 分のところに位置しています。会場までの交通案内の詳細は同封の「大会資料」をご覧ください。また宿泊を必要とされる方は早めの予約が肝要かと思われます。なお会場校の責任者である石川慎一郎先生には準備段階から多大なるご尽力をいただき深く感謝申し上げます。

第 33 回大会では、恒例になりました午前中のワークショップのほか、午後には研究発表・実践報告 6 件とシンポジウムが行われます。

午前中のワークショップでは、田中省作氏(立命館大学)と小林雄一郎氏(法政大学非常勤講師)に「二乗検定再入門」という題で、コーパス間の頻度分布の違いを分析する時に欠かせない、初歩的ですが汎用性の高い二乗検定の解説と実習を行っていただきます。

研究発表・実践報告については、運営委員の査読を経て準備委員会で最終的な審査を行った結果、次の 6 件が決まりました。研究発表として岡田晃氏(大東文化大学大学院生)の「*Piers Plowman* における否定接頭辞 in- と un- の考察」、住吉誠氏(摂南大学)の「動詞 take が現れる Retroactive Gerund 構文の分析: BNC を利用して」、森田順也氏(金城学院大学)の「動詞由来名詞の補部の継承可能性: BNC 調査を中心として」、村上明氏(東京外国語大学大学院生)の「多次元分析による日本とアジア諸国の英語教

科書研究」、能登原祥之氏(比治山大学)の「日本人英語学習者のイベントスキーマと文型への親密度: JEFLL Corpus の分析を通して」、実践報告として中條清美氏(日本大学)、西垣知佳子氏(千葉大学)の「パラレルコーパスを活用した学習者中心の英語授業」ということで、英語学と英語教育の 2 室に分かれての発表となります。

シンポジウムでは、これまでの大会でもワークショップやシンポジウムで何度も扱われ、好評を博してきた「コーパスと統計処理」の問題が取りあげられます。今回は、田畑智司氏(大阪大学)の司会の下、「コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース」というテーマで各講師がそれぞれの統計学的アプローチを用いてポリティカルディスコースの諸特徴を浮き彫りにしていきます。まず高見敏子氏(北海道大学)が「語彙頻度と統計的手法: 英国二大政党のマニフェストにみる特徴語」、石川慎一郎氏(神戸大学)が「コーパスに基づく批判的談話分析: 首相官邸英文メールマガジンの量的語彙解析」と題して、田畑智司氏(大阪大学)が「多変量アプローチで俯瞰する歴代米国大統領就任演説の言語変異: Washington から Obama まで」、後藤一章氏(大阪大学)が「歴代米国大統領就任演説における統語構造の変異」、前田忠彦氏(統計数理研究所)が「言語研究と統計: 記述と推測」の題で、それぞれ発表されます。オバマ新大統領が誕生したばかりのこの時期にタイムリーな内容といえましょう。

以上のように、今回の大会では、まずワークショップで実習を通してコーパスと統計処理に関する基本を理解したうえで、午後のシンポジウムに臨んでいただければ、より理解が深まる

ものと思われます。多数のご参加を期待しております。

午前中のワークショップに参加希望の方は郵便・電子メール(件名「ワークショップ申込」)で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局までお申し込みください。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

#### 英語コーパス学会賞募集

第 8 回英語コーパス学会賞を募集いたします。学会賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

学会賞選考委員長 投野 由紀夫

【対象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 同封の推薦理由書。

2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2009 年 3 月 31 日(火)

【発表】2009 年度秋季大会

#### 会誌『英語コーパス研究』第 16 号について

前回報告の通り、今回の研究論文投稿数は 5 編でした。査読の結果、2 編が掲載されることとなりました。例年と比較して、かなり少ない掲載数の冊子となりました。論文本編の他、大会記録の掲載を含め、現在、印刷、製本の工程に入っています。5 月の刊行を予定しております。

会誌『英語コーパス研究』は、研究論文、研究ノートのほか、書評やコーパス紹介、ソフトウェアレビュー、実践報告なども投稿可能です。次号では、多くの投稿を期待しております。

編集委員長 塚本 聡

#### 東支部活動報告

東支部では今年度より、支部長が新井洋一先生(中央大学)から投野由紀夫(東京外国語大学)に交代しました。東支部では関西地区よりもまだ学会員が少ないため、裾野を広げる啓もう活動を重視。特にコーパス言語学に関心のある院生や若手研究者が足を運びやすい企画を練ろうということで、2009 年 3 月 23 日(月)に東京外国語大学を会場に、初心者向けのツール講習会を行います。約 10 種類くらいのコーパスツールの概要を把握するという 1 日講習会に、塚本聡氏(日本大学)、石井康毅氏(東京理科大学)、小林雄一郎氏(法政大学非常勤講師)、金田拓氏(東京外国語大学院生)、村上明氏(東京外国語大学大学院生)、そして投野といった学会員がインストラクターとして登場。中高の英語教員や院生、学部生を対象にスモール・グループでツールの特徴や使用方法などをチュートリアル形式で紹介します。

支部長 投野 由紀夫

#### 2009 年度の大会日程と開催校

第 34 回大会 10 月青山学院大学(日程未定)

#### 新入会員紹介(3 月 5 日現在、S は学生)

深谷 晃彦 群馬県立女子大学

#### 事務局から

会費納入のお願い

2009 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を同封の払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお日本

郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2009年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第16号は2008年度の会費を納入していただいた方にのみ、送付いたします。また、2年続けて会費未納の場合、*Newsletter*などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

## FORUM

### 日本人英語学習者による 英語朗読音声データベースの公開

赤野 一郎(京都外国語大学)  
i\_akano@kufs.ac.jp

このたび、京都外国語大学応用コーパス言語学研究会では、筆者が代表を務める共同研究「e-learningに適したコーパス構築・コーパス検索システムの開発研究」の一環として、編纂作業を進めてきました「日本人英語学習者による英語朗読音声データベース」が公開の運びとなりました。このデータベースは、京都外国語大学高等教育研究開発推進経費の一部を得て作成されたものですが、非営利の教育および研究を目的とする場合に限り、利用していただくことができます。

このデータベースには、高校2年生・大学1年生、3年生(共に英語専攻、非専攻)・英語母

語話者による物語文と説明文の朗読音声、およびその対訳・翻訳である日本語の朗読音声が収録されています。調査協力者は60名、音声ファイルは延べ220ファイル、収録時間は12時間です。本データベースには、2つの情報が付与されています。1つ目は、学習者の語彙力に関するもので、語彙力からみた英語力別の調査が可能となっています。Paul Nationがインターネット上で公開している語彙サイズテストを利用し、1000語、2000語、3000語レベルの語彙サイズを測定し、その結果をデータとして付与しています。2つ目は、コミュニケーションを行う上で大切な要素と考えられる、相手にどのように聞こえるかといった流暢性(fluidity)と表現力(expressiveness)の評定結果です。英語を母語とする外国人教師3名と日本人英語教師3名が流暢性と表現力に関して1から7のスケールで主観評価を行っており、この結果が情報として付与されています。

Cowie, Douglas-Cowie & Wichmann(2002)は、韻律(prosody)の要素の1つであるイントネーションが、談話の内容やニュアンスと関係し、話し手の意思や心的態度、感情を表すとしており、ワグナー・川島(1986)は、母音の長さにより感情表出ができるとしています。このように、このデータベースは、言葉そのものには表れてこない情報を探る手がかりになります。

利用可能性としては、付与されている情報に基づき、学習歴や習熟度別の音声習得状況の記述、テキスト間の比較、日本語・英語の比較が可能です。またリズムやイントネーションといった韻律的要素の影響を調査する基礎研究にも広く利用できます。さらに音声セグメントラベル、韻律情報などのタグ付与研究に利用可能で、音声認識に限らず、音声合成、音声知覚、音声分析などの研究にもつながると思われま

す。利用をご希望の方は、郵送(送料実費負担)にて配布いたしますので、京都外国語大学応用コーパス言語研究会まで、メールでご連絡ください。利用に関する同意書をお送りいたします。その際、件名に「データベース希望」と明記の

上、下記の連絡先まで、お名前、ご所属、ご住所をお知らせ下さい。

連絡先: 京都外国語大学応用コーパス言語学研究会  
jelreadaloud@gmail.com

#### 新刊紹介

新井 洋一 (中央大学)  
araiguma@tamacc.chuo-u.ac.jp

*Corpus Linguistics: Critical Concepts in Linguistics*. 6 volumes. ed. by Wolfgang Teubert & Ramesh Krishnamurthy (Routledge2007), 2,460 pages, £ 835.00 ISBN: 978-0-415-33895-0

本書は過去約 50 年間に出版された約 125 名の執筆者による 119 の論文を集めた、6 巻からなるコーパス言語学のアンソロジーである。もっとも古いものとしては、Randolph Quirk 1960 “Towards a Description of English Usage” が、最新のものとしては、Robert de Beaugrande 2007 “Corporate Bridges’ Twixt Text and Language” が収録されているが、おもな論文は、1999 年から 2005 年のあいだに出版されたものである。第 1 巻の背表紙には、Dedication: In fond memory of John Sinclair (1933-2007) a pioneer of corpus linguistics and an illuminating mentor, colleague, and friend とあり、出版直前に亡くなったコーパス言語学開拓者への敬意が込められている。

各巻はいずれも 2 部構成になっており、全 12 部の内容は以下の通りである。

- Part 1 Theoretical aspects of corpus linguistics
- Part 2 History of corpus linguistics
- Part 3 Corpus composition and compilation
- Part 4 Standardisation, alignment, tagging and corpus-related software
- Part 5 Lexicography, collocation, idioms and phraseology
- Part 6 Terminology
- Part 7 Grammar
- Part 8 Translation studies, multilingual and parallel corpora

Part 9 Translation studies, multilingual and parallel corpora

Part 10 Language history / historical linguistics

Part 11 Language teaching

Part 12 Spoken language / discourse studies

これらの多くは、既刊の本や論文集からの再録であり、全体的に目新しさは感じられないかもしれないが、複数の本や論文に散らばっていたものが、このような形でまとめられたのは有り難い。たとえば Fillmore 1992 (以下太字のものは収録論文を意味する) は、“My conclusion is that the two kinds of linguists need each other. Or better, that the two kinds of linguists, wherever possible, should exist in the same body”と語っている。この 2 種類の言語学者とは、コーパス言語学者と生成文法学者のことであるが、第 1 巻のいくつかの論文を読み進めると、コーパス言語学と生成理論の対立的な構図について、それぞれの時代の変化を読み取れよう。

Brown コーパスの編纂者による Francis 1982 では、1962 年のある学会で、「コンピュータ処理可能な現代米語の 100 万語のコーパス編纂用の補助金を政府から獲得した」と、R. Lees 教授 (後に、Chomsky の最初で、かつ最大の信奉者の一人になる学者) に話したところ、「君の時間と政府のお金のまったくの無駄である。君は英語の母国語話者だ。10 分あれば、英文法のどの項目についても、無作為抽出のテキストの何百万語の中を探すより、ずっと多くの具体例を生み出せよう」と言い返され、今でも忘れられないという逸話が述べられている。

Leech 1990 では、過去約 30 年間にわたって、コーパスの価値に関する 2 つの影響力の強い対立見解があり、いずれも均衡のとれた見方をとろうとしてこなかったことを先ず述べている。その一方は、コーパスを唯一の価値ある言語学的根拠と見なし、母国語話者の言語直観を不適切な根拠 (invalid source of evidence) とみなす Bloomfield の影響を受けた言語学者たち (Fries, Hill, Harris) であり、また一方は、全く逆の見方をする、後に現れる Chomsky とその信棒者たちであるとしている。Leech はコーパス利

用に対する反対論の例を4つあげ、さらにそれぞれに対し反駁論を次のように展開している。

コーパスは直観や内省の代用とはならないが、特にデータ収集において、母国語話者の直観を強力に手助けする道具となる。

直観が役に立たない言語研究の分野(たとえば社会言語学的変種の研究)では、コーパスが不可欠である。

言語能力と言語運用の明確な区分は最近、特に社会言語学、語用論、テキスト言語学の分野では、ますます疑わしくなっているうえ、統語論や意味論の分野でさえ、文法の容認性を程度の問題(a matter of degree)、あるいは、漸次性(gradience)といった概念をとり入れることで説明できるようになる。

限定されたコーパスは歪みや偏りがある(skewed and biased)ものの、その限界を公開し、より代表性の高い、より大規模なコーパスを築き続けることで、限界を克服すべきである。

歪みや偏りは言語直観にも見られるもので、コーパスに頼らないと、もっとも典型的な例か、あるいは逆に容認度が極端に低いぎりの例を探そうとする傾向があり、コーパスによる分析なら当然無視されることのない、中間にあるような例を見落としやすいと指摘する。コーパスが直観の代用をするとか、その逆ではなく、それぞれの長所がそれぞれの短所を補い合うことが大切であると述べ、後半では、*seem/appear*, *almost/nearly* の2つの同義語について分析し、言語直観に頼る内省では区別できない言語学的特徴を、コーパス分析によって明らかにしている。最後のまとめとして、直観についての内省(introspection (about intuition))、コーパス(corpora)、被験者を使った誘出実験(elicitation experiments)の3つを相互に使うと述べられている。

Aarts 2000 では、前半で、理論言語学と記述言語学の関係についての Chomsky へのインタビュー(時期は明示されていないが、1990 年代

後半と推測される)内容を紹介している。その中で、コーパス言語学への Chomsky の見解が次のように引用されている。

コーパスを使うのではなく、問いかけてみることだ。まさに自然科学でやっていることをすることだ。(中略)少なくとも17世紀以降の科学革命の大きな見識の一つは、データを整えても(arrangement of data)、何の目的も達成されないということだ。自然に関する探求的な問いかけ(probing question of nature)をしなければならない。それこそがいわば実験(experimentation)であり、何らかの意味のある答えが得られるかもしれない。さもなければ、ただ屑(junk)を得るだけである。

Aarts は、Chomsky の見解にはそのまま受け入れることができない誇張があるものの、「計算ごと」(number crunching)と揶揄され、頻度表示だけで終わり、「だから何なのか?」「So what?」と質問されてしまうような研究から、言語学的に意味のある質的な研究(qualitative research)を行うべきである、という点については同意している。そして後半では、主語+「動詞+2重目的語(ditransitive)」、主語+「動詞+名詞+不定詞句・現在分詞句(transitive)」からなる節が、主語の位置に現れる頻度がなぜ低いのか、といった言語学的問いかけについて、ICE-GB の検索ツール ICECUP を使いながら、質的に有用な研究例を紹介している。

Léon 2005 では、Corpus Linguistics という用語が、lexicography, descriptive linguistics, applied linguistics の分野から、直観が利用できない故にコーパスが不可欠な language variation, dialect, register and style, diachronic studies までの、様々な異種分野で使われていることに注目すべきであるとしている。これらの分野に唯一の共通点は、大規模なテキストコーパスか、あるいは自発的発話文の利用である。

彼女の論文の焦点は、Brown Corpus の先駆性(anteriority)への疑問、「30年間にわたるコーパスデザインの中断」という見解への反論、

Chomsky のコーパスや統計処理への反対の立場に対する疑義、の3点に置かれており、異色の内容となっている。

まず、 の議論で興味深いのは、英米の二人の言語学者の存在である。Brown Corpus は、Firth の教え子の Randolph Quirk と、アメリカ人ゲルマン語学者 Freeman Twaddell の合作案から生まれたものであるという。Quirk は、1951 年に奨学金をとってアメリカに滞在中、ブラウン大学で Twaddell と会い、ミシガン大学では Charles Fries の後任として教えている。Quirk は、1959 年に University College London(以下 UCL)で、Survey of English Usage (以下 SEU)という、イギリス英語の話し言葉・書き言葉コーパスの作成を決意した。SEU 計画は、Fries の話し言葉の統語論に関する経験的手法に負うところが大きく、その計画は英国言語学会 (the Philological Society) に提出された。

一方 Twaddell は、1955 年に Henry Kučera をブラウン大学に招き、彼のコーパスプロジェクトにも加えた。1962 年に Francis は、Ford 財団から奨学金を得て、UCL で SEU に取り組んでいる。1963 年には、Quirk は Brown Corpus の細目を確定する会議に出席し、主要な決定をおこなっている。Brown Corpus は、1963-1964 年の間に収集され、その分析は 1965-1966 年に行われ、その結果は 1967 年に発表された。SEU とブラウンコーパスの結びつきは強く、彼女によれば、Brown Corpus の成立は、SEU を抜きにしては語れないというものである。また SEU の他に、The Trésor de la Langue Française for French, The Rand Corpus などのコーパスが、Brown Corpus より先にあったという事実が指摘されている。

について Léon は、特に次のような Leech の主張を問題視している。

The impact of Chomskyan linguistics was to place the methods associated with CCL [Computer Corpus Linguistics] in a backwater, where they were neglected for a quarter of a century. (Leech 1992: 110)

The discontinuity can be located fairly precisely in the late 1950s. Chomsky had effectively put to flight the corpus linguistics of the earlier generation. (Leech 1991:8)

コーパス言語学者の中には、1950 年代の構造主義の経験主義と統計分析とを結びつけ、それが Chomsky の合理主義(rationalism)によって 25 年間取って代わられ、1990 年代のコンピュータによる解放を待つことになったという人もいる。ここで問題なのは、彼女が であげた「コーパスデザイン」については、Leech は何も言っておらず、Leech が述べているのは、コーパス依存による研究成果があまり出てこなかったということである。コーパスデザインは、彼女自信も述べているように、1975 年の London-Lund Corpus of Spoken English(LLC)、1978 年の the Lancaster-Oslo-Bergen Corpus of British English(LOB)、1987 年の the Collins Birmingham University International Language Database などが後に続いており、それぞれの年代にコーパス作成に関する空白時期はなく、の設定には無理があるように思われる。また彼女は、Corpus Linguistics という術語の 1990 年代の出現は、その支持者らがその用語を学問分野として確立する (legitimate as a discipline) ために使ってきているもの、と決めつけているが、この点も慎重さが必要ではなからうか。

最後に について彼女は、Chomsky は Corpus を攻撃していたのではなく、単に頻度を出すだけの統計処理や、特に統語論や意味論の研究に対してまでもマルコフモデル(Markov models)を使うのを攻撃していたのであり、コーパス依存の研究が長く中断させられた責任は、Chomsky にもなかったとまとめている。

スペースの制限からこのあたりで筆を置きたいと思うが、特に気になった点は、重要な論文がいくつか欠落している印象を受けたことである。たとえば、Part 10 は通時的言語研究を扱っているが、Matti Rissanen による研究としては beside(s)を扱ったものが収められているだけで、「that/zero 補文標識」と「迂言的 do」に関する論文は、どちらも収められていない。著作権の問題があるのかもしれないが、物足りなさが残った。Part 12 で話し言葉に関する分野が入ったのは興味深いのが、Ann Wichmann の論文が一つもないのは残念でならない。全体で 6 巻か

らなり、ハードカバー版は高額であるので、大学の図書館あるいは研究室で購入し、是非学生への便宜を図ってあげたい。

#### References

- Aarts, Bas. 2000. "Corpus Linguistics, Chomsky and Fuzzy Tree Fragments," *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*, pp.5-13. Amsterdam: Rodopi.
- Fillmore, Charles. 1992. "'Corpus Linguistics' or 'Computer-Aided' Armchair Linguistics," *Directions in Corpus Linguistics*, pp.35-60. New York: Mouton de Gruyter.
- Francis, W. Nelson. 1982. "Problems of assembling and computerizing large corpora," *Computer Corpora in English Language Research*, pp.7-24. Bergen: Norwegian Computing Centre for the Humanities.
- Leech, Geoffrey. 1990. "The Value of a Corpus in English language Research: A Reappraisal," *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi*, pp. 115-126. Tokyo: Kuroshio.
- Leech, Geoffrey. 1991. "The State of the Art in Corpus Linguistics," *English Corpus Linguistics: Studies in Honour of Jan Svartvik*, pp. 8-29. London: Longman.
- Leech, Geoffrey. 1992. "Corpora and Theories of Linguistic Performance," *Directions in Corpus Linguistics*, pp.105-122. New York: Mouton de Gruyter.
- Léon, Jacqueline. 2005. "Claimed and Unclaimed Sources of Corpus Linguistics," *Henry Sweet Society Bulletin*, 44, pp.36-50. <http://htl.linguist.univ-paris-diderot.fr/jleonfre.htm>

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 65

June 1, 2009

■会長: 赤野 一郎  
■事務局: 〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 井上永幸研究室内  
■TEL: 088-656-7125 ■振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [inoue@ias.tokushima-u.ac.jp](mailto:inoue@ias.tokushima-u.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 33 回大会報告

### ■概要

英語コーパス学会第 33 回大会は、4 月 25 日 (土)、神戸大学国際文化学術研究科 (鶴甲第 1) キャンパスで開催されました。雨模様の天候にもかかわらず 105 名 (会員 92 名, 新入会員 4 名, 当日会員 9 名) という多くの参加がありました。ちなみに午前中のワークショップの参加者は 59 名でした。

恒例のワークショップは「 $\chi$  二乗検定再入門」と題して、前半は田中省作先生 (立命館大学) に  $\chi$  二乗検定のエッセンスをわかりやすくご説明いただき、後半は小林雄一郎先生 (法政大学非常勤講師) にさまざまな言語データを正しく分析するためのノウハウを実践的にご紹介いただきました。前半の田中先生のご説明で、 $\chi$  二乗検定に対するイメージがこれまで以上に具体的に身近なものに感じられるようになりました。また、後半の小林先生のハンズオン実習はフリーの統計分析環境である R を用いたものですが、事前の知識を前提としていないにもかかわらず、2 行ほどのスクリプトでかなり本格的な検定を試みることができることを分かりやすく示していただきました。非常に分かりやすく、有意義で興味を持てるワークショップであったとの感想を参加者からも耳にしました。講師の方々にこの紙上を借りてお礼申し上げます。

午後の大会では、赤野一郎会長 (京都外国語大学) の開会の挨拶のあと、開催校を代表して神戸大学国際コミュニケーションセンター長の加藤雅之先生にご挨拶をいただきました。引き続き、家口美智子先生 (摂南大学) の司会により年次総会が開かれ、2008 年度の決算報告と会計監査報告、2009 年度の予算説明があり承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。最後に学会賞に関して、学会賞には 1 件の応募があり、奨励賞には応募が無かった旨、山崎俊次前事務局長から報告がありました。引き続き「言語研究」と「英語教育」のテーマでのパラレルセッションがもたれ、前者においては 3 件の研究発表が、後者においては 2 件の研究発表と実践報告が行われました。続いて、午前中のワークショップと連動して「コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース」のテ

マでシンポジウムが行われました。それぞれの司会の先生にご執筆願いました概要につきましては、「研究発表」および「シンポジウム」のセクションをご覧ください。最後に、開催校の石川慎一郎先生の閉会の辞をもって、第 33 回大会の幕を閉じました。

大会終了後の懇親会には 59 名の参加がありました。森口稔先生 (広島国際大学) の司会のもと、会長挨拶の後、前会長の中村純作先生 (立命館大学) の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8 時にはすべての大会行事が終了いたしました。

今回の大会は、雨天・強風という条件にもかかわらず、事務局の予想を上回る盛会となりました。本学会員で開催校責任者でもある石川慎一郎先生には、受付、ワークショップ、研究発表、シンポジウムなど大会準備における細かい準備と心配りから、シンポジウムにおけるご自身の発表に至るまで、まさに超人的なご尽力をいただきました。加えて大会実施に協力くださった学生、院生の方々にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

### ■研究発表

#### Piers Plowman における否定接頭辞 in- と un- の考察

岡田 晃 (大東文化大学大学院生)

発表では、William Langland の *The Vision of Piers Plowman The B-Text* における否定接頭辞 in- と un- の使用実態の調査・分析が報告された。主な論点は次の 3 点である。(1) 接辞 in- と un- は、それぞれどの程度の割合で [+ latinate] または [- latinate] の基体に付加されているのだろうか。調査の結果、まず、type 数で 38 の un- 派生語の内、un- が外来語の基体に付加されたものが 13 語 (34.21%) あることが判明した。そして、この外来語に付加された 13 語の un- 派生語の内、現代に残っているものは 9 例で、残りの 4 例は obsolete または rare となっていることが報告された。一方、in- 接辞は type 数 9 例すべてが外来語に付加されていた。この 9 語の内、inobedient はおそらく disobey が存在することから、disobedient に取って代わられたことが示唆された。以上のことから、接辞 un- は、後期中英語期において本来語、外来語を問わず付加される強い造語力

を有する接辞としてすでに認識されていたのに対して、in-の方は、外来語の一部として借用され、英語話者の中では造語力をもつ接頭辞としてほとんど認識されていなかったのではないかと、という示唆がなされた。(2) in-と un-の接辞が付加される基体の品詞に関しては、ともに60%以上の確率で形容詞に付加され、残りは名詞と副詞に付加されている。形容詞の派生語では、in-も un-も kynde, hardy, possible などの「基本的な」形容詞に付加されることが最も多いが、un-は unblest のように、過去分詞形に付加される用例も目立つこと、-able では un-と in-の双方に付加された例がみられ、外来の接辞でもこちらは(in-とは異なり)、後期中英語期においてすでに造語力のある接辞として英語に定着しつつあったこと、などが指摘された。(3) Innocence is next God, and nyght and day it crieth や Unblest artow, brewere, but if thee God helpe. のような事例より、in-や un-などの接辞は頭韻には関与していないことが指摘された。

質疑応答では、2つの否定接辞を調査するのに *Piers Plowman* を選んだ理由について、また、いくつかの un-派生語の品詞分類について質問がなされた。前者については、発表者が以前 *Piers Plowman* を別のテーマで取り上げた関係があったこと、後者については、当該の語が文脈中で使用されている機能に基づいて分類を行った旨回答がなされた。また、in-接辞が英語の中で造語力を獲得しなかった理由について、in-には「中へ」という意味があることが、否定の接辞としての確立を妨げたのではないかと、という見解等が開示された。

山崎 聡 (千葉商科大学)

#### 動詞 take が現れる Retroactive Gerund 構文の分析 : BNC を利用して

住吉 誠 (摂南大学)

発表では、(1) のような take が現れる Retroactive Gerund 構文について、BNC からの用例を仔細に検討することで、その特徴と意味解釈の様態の解明が試みられた。

- (1) a. Such scars will take a lot of healing. (BNC)  
 b. it is a vicious circle which takes some breaking . . . (BNC)

まず、この構文では、gerund である doing が常に a lot of / some などの限定詞を伴うことが指摘された。この点は worth の evaluative adjective, deserve, merit などの evaluative verbs, take と類義の need や require などが関わる Retroactive Gerund 構文とは異なる特徴である。このことから、take が現れるこの構文の doing を純粋な名詞であると考えられる見解もあるが、この doing は動名詞であることが主張された。理由として、(1) need などが現れる Retroactive Gerund 構文にも a lot of などの限定詞がつくこともある、(2) In the drawing-room he took a great deal of persuading to sit down, and . . . (BNC) において、persuading は「補部らしい補部」を

従えている(それゆえ動詞的)ことが指摘された。

次に、BNC に出現した例をもとに、take が現れるこの構文の doing に生じる動詞の意味特徴が、「状態変化」「伝達行為」「動作」に大きく分けられることが指摘された。take が現れる Retroactive Gerund 構文は「時間がかかる」と「難しい」の2つの意味を表すが、このいずれかに解釈されるかは、doing の意味特徴によるところが大きいという。つまり、doing が「状態変化」の意味特徴を持つ場合は「時間がかかる」の意味に、一方、doing が「伝達行為」「動作」の意味特徴を持つ場合は「難しい」の意味になる傾向が強い。((1a) では heal は「状態変化」を表すので、「時間がかかる」の意味に、(1b) では breaking は「動作」を表すので、「難しい」の意味に傾く。)そして、このような意味解釈の様態は、やはり行為の量に関わる日本語の「よく」の意味解釈が、それと共に起る動詞の意味特性によって変わることと同様であることが指摘された。

また発表では、(1) の基本タイプとは別に、(2) に示された take some doing の型があることにも触れられた。こちらにも(1)の基本的タイプと同様、上記の2つの解釈が可能だが、その主語には動名詞または(関係)代名詞(it, which など)が来る点が前者と異なるという。

- (2) Succeeding at my drinking career had **taken some doing**, even perseverance. I was never really cut out for drinking—I just wasn't that good at it. (Michael J. Fox, *Lucky Man* (2002), p. 154. New York: Hyperion)

フロアーからは、take が現れる Retroactive Gerund 構文の doing には、その他の Retroactive Gerund 構文とは異なり、a lot of / some などの限定詞を常に伴う理由について質問があったが、それについては、take は need や require などと異なり多義的であるので、量を表すのに限定詞を伴うのではないかと回答がなされた。また、関連する先行研究の教示があった。

山崎 聡 (千葉商科大学)

#### 動詞由来名詞の補部の継承可能性 : BNC 調査を中心として

森田順也 (金城学院大学)

発表では、接尾辞 -(a)(t)ion, -ment, -al, -ance, -ure で終わる動詞由来名詞(派生名詞)が、その基体動詞の補部をどこまで継承するのかを、BNC を用いて詳細な調査を行った。調査を通じて、直感に基づく理論指向の先行研究が派生名詞の補部継承に関して行う予測とは異なる記述的一般化が提示された。

まず、Quirk et al. (1985) 及び Levin (1993) に基づいて、関連する動詞の補部が計12の型に類別された。そして、Randall (1982), Grimshaw (1990), Kayne (1981) の各理論によれば、派生名詞化に伴うこれらの補部型の継承可能性についてどのような予測がなされるかが紹介された。すなわち、Randall (1982) の「継承原則」からは、[+\_ NP]型のみが継承可能と予測される。

Grimshaw (1990) のメカニズムに従うと, [\_\_+ NP to VP], [\_\_+ NP that S], [\_\_+ NP wh S], [\_\_+ NP NP] を除くすべての補部型が継承できる。これら 4 つの補部型に加えて, Kayne (1981) のシステムでは, 場所交替型 (e.g. [\_\_+ NP PP [+with]], to inject a patient with photosensitive drugs) も継承できないと予測する。

次に, BNC を利用した事実観察によって, 従来の理論の予測が的確でないこととそれに代わる記述の一般化が示された。具体的には, Lehnert (1971) 及び Hornby (1974) の補部型情報を利用して, 上記 12 種の補部を取る動詞の派生語のリスト (計 570 タイプ) を作成した。そして, それぞれに対応する派生名詞の継承の例が BNC に観察されるか否かの網羅的な調査の結果が, 12 (一部統合があるので実際には 10) の補文型に分けて報告された。調査の結果判明した記述の一般化として, 次の 3 点が報告された。(1) [\_\_+ NP NP] (e.g. \*Bill's assignment of Mary (of) a sonata) 以外のすべての補部型に対する継承の例が BNC に見出せる。(2) 名詞化の際に完全に継承される補部 ([\_\_+ NP] 及び [\_\_+ PP]), 完全に継承されない補部 ([\_\_+ NP NP]), 部分的に継承される補部 (残りの 9 タイプ) という具合に, 継承性に関する補部の階層関係 (ランキング) が認められる。(3) 部分的に補部が継承されるタイプでは, それらがどの程度広く異なる派生名詞に継承されるかで, その継承力に段階性が認められる。

フローアからは, BNC で継承が確認されない派生名詞の継承可能性についてインフォーマントからの判断を仰ぐのも手ではないかという示唆, また, [\_\_+ (P) wh S] と [\_\_+ (P) wh to VP], [\_\_+ NP/PP wh S] と [\_\_+NP/PP wh to VP] の補部型がそれぞれくくられて調査されているが, [wh to VP] は [wh S] に比べて制約があることが指摘されているので, 派生名詞の補部としても両者を分けて調査を行った方がよいのではないか, というコメントが開示された。

山崎 聡 (千葉商科大学)

### 多次元分析による日本とアジア諸国の英語教科書研究

村上 明 (東京外国語大学大学院生)

本発表は, 日本の中学校と高等学校の英語教科書, および中国・韓国・台湾の小学校から高等学校までの英語教科書をコーパス化し, Biber (1988) の多次元分析を適用することによって教科書に使用されている言語項目の類似点と相違点を抽出する試みを論じたものである。研究方法としては, 電子化した教科書コーパスを話し言葉と書き言葉のサブコーパスに分け, Biber (1988) で用いられている言語項目の中で, 品詞・レンマ情報のみで再現可能な 56 の言語項目について頻度を算出し, このうち一定の頻度が観察された 21 の言語項目を観測変数として因子分析を行った。さらに, 残りの 35 の言語項目に関しては, 高校教科書にもあまり見られない項目を上位概念にまとめるなどして 24 の言語項目とし, 高校の英語教科書のみを対象として因

子分析を行った。分析の結果, 1) 日本の英語教科書における話し言葉は他の国の英語教科書に見られる話し言葉よりも使用している言語項目が多い, 2) 言語項目の使用という観点から, 中国と台湾の英語教科書は類似しており, 日本と韓国の英語教科書は類似している, 3) 中国と台湾の英語教科書は日本や韓国の教科書よりも難解である可能性がある, 4) 過去分詞による後置修飾といった上級レベルの言語項目は高校の教科書においても頻度が比較的低く, 一般的な英語において観察される使用とは異なる使用が見られる, ということがわかった。

質疑応答では, 教科書から話し言葉の部分を抽出する具体的な方法や他の統計手法を用いた分析の可能性, 対象とした国々の教科書に見られる類似点や相違点, あるいは「難解である」と解釈される言語的特徴をより具体的に示す必要性について議論された。今後のさらなる研究成果が期待される。

成田真澄 (東京国際大学)

### 日本人英語学習者のイベントスキーマと文型への親密度: JEFLL Corpus の分析を通して

能登原祥之 (比治山大学)

本発表は, 日本人英語学習者 (大学生) の未発達で断片的になりやすい「動詞パターン (verb pattern)」の使用を, JEFLL Corpus の分析を通して把握しようとするものである。この動詞パターンの分析には, 教育的意義を考慮して「イベントスキーマ」と「文型」の双方の視点を組み入れており, 分析に使用するイベントスキーマとそれに伴う文型は Radden & Dirven (2007) に基づいて選定している。研究方法としては, n-gram 分析を通して動詞を中心とした頻出語群と構文の特徴を調べ, 学年別に「各イベントスキーマを代表とする動詞」の頻度表を作成し, コレスポネンス分析を用いて各動詞と各学年の統計的な対応関係を「文型」と「イベントスキーマ」の各々の視点で抽出した。分析の結果, 1) 「イディオムの句表現」で使用されやすい動詞 (e.g. go out) と, 「自由選択的句表現」(e.g. 「become a + 名詞」) で使用されやすい動詞がある, 2) 全ての学年において, SV, SVC, SVO の 3 種類の文型に親密であることが確認されたが, 「イベントスキーマ」によって親密度に差が見られる, 3) 分析に使用した 12 種類の動詞のうち, 中高生のどの学年においても, be (Occurrence: States), have (Possession), like (Emotion), go (Self-Motion) がよく使用される, 4) 一方, break (Action), sell (Action Mid: 中間構文), put (Caused Motion), give (Transfer) については相対的に未発達になりやすい, ということが確認された。

質疑応答では, 「イベントスキーマ」の分類を事前に決めるのではなく「イベントスキーマ」が動的に変化する過程をコーパスから抽出するというコーパス駆動的な研究アプローチも興味深いのではないかという提案や, コーパスデータを使用する際に英作文のトピック

クによる影響を考慮する必要がある（フィルタリングして再分析する等）という指摘がなされた。本研究の成果を動詞パタンの指導にどのように取り入れていくのか期待したい。

成田真澄（東京国際大学）

#### パラレルコーパスを活用した学習者中心の英語授業

中條清美（日本大学）  
西垣知佳子（千葉大学）

本発表では、日英パラレルコーパス（内山・井佐原, 2003）を利用した Data-driven Learning (DDL) を大学初級レベルの文法指導や大学上級レベルの語彙指導に取り入れた授業実践報告が行われた。まず、大学初級レベルの学習者が名詞句と動詞句を中心に自立的に文法学習を行う DDL 活動に関して、具体的な指導方法と文法タスクが事例で示され、本指導実践を 3 年間に亘って継続してきたことで明らかになった指導効果についても論じられた。明示的指導と暗示的指導がうまく組み合わせられている授業実践である。続いて、大学上級者向けの DDL 語彙指導の実践例として、中学・高校で学んだ教科書基礎語彙の形と意味、コロケーションに関する知識を新聞英語を通して深め、実社会で使えるレベルに高めることを狙いとする授業が紹介された。さらに、新しい試みとして、パラレルコーパスを利用した日本語教育用 DDL 教材の作成と実践についても触れ、DDL のさらなる可能性が示された。

質疑応答では、本研究で使用している日英パラレルコーパスに関する質問や画面上での日本文と英文の対応表示を縦方向や横方向の対応、あるいは行単位での対応といった具合に自由に切り替えられるようなインタフェースへの要望が出された。大学初級レベルの学習者が取り組めるように、入念な指導計画（第二言語習得における発達段階を考慮した計画）と教材選択、ワークシートの作成を継続されており、授業で DDL を体験した学生からはポジティブな反応が得られている。DDL を実際の外国語指導に取り入れるためには解決すべき問題点が多いと指摘されるなか、本発表のような教育現場からの DDL 教材作成の試みや授業実践の報告は意義深い。

成田真澄（東京国際大学）

#### ■シンポジウム

##### コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース

##### 「語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語」

講師 高見敏子（北海道大学）

1979-2005 年の過去 7 回の英国総選挙における労働党と保守党のマニフェストを対象として語彙頻度の比較を試みた。計 9,128 語の異なり語について、まず計 14 のテキストのすべての組み合わせ（計 91 通り）で対数尤度比を計算し、有意差の有無のパターンを調べ

たが、特徴語の体系的な特定には至らず、組み合わせの数が多い場合は多重比較を避ける方が良いことを示す例となった。そこで次に「与党と野党」「保守党と労働党」「New Labour とそれ以前」等の各視点からテキストを 2 群に分けて語彙頻度の比較を行い、例えば「与党のマニフェストには continue が多い」など、いくつかの特徴語を特定することができた。

##### 「コーパスに基づく批判的談話分析：首相官邸英文メールマガジンの量的語彙解析」

講師 石川慎一郎（神戸大学）

言語は思想の器としてそれ自身は無色透明な媒体とみなされがちである。しかし、言語やテキストは、書き手と読み手の間に非対称の関係を生み出し、しばしばそこに政治性や思想性が生じる。これらを明らかにするのが批判的談話分析 (CDA) の目的である。しかし、CDA が信頼できる成果をあげるためには量的データの客観的分析と適切な解釈が不可欠であり、この点において CDA はコーパスや言語統計と高い親和性を持つ。本発表では、過去 4 年分の日本の「首相官邸メールマガジン（英語版）」をコーパス化したうえで、量的データの統計的分析の結果を CDA につなげる可能性について検討・報告した。

##### 「多変量アプローチで俯瞰する歴代米国大統領就任演説の言語変異：Washington から Obama まで」

講師 田畑智司（大阪大学）

米国歴代大統領の就任演説に見られる文体の変異やディスコースの特徴を俯瞰するために、多変量文体分析モデルによって就任演説 56 点の高頻度語 100 タイプの生起パターンを解析した。その結果、I-style から We-style への変化、関係詞節（特に pied-piping 構文）の減少、属格標識 ('s) の増加、高頻度名詞の推移などの史的变化が認められた。これらの変化は個別の現象ではなく、増加・多様化する聴衆を前に、より簡潔な文体で、自由主義世界の盟主たる米国の国家的価値観を宣揚し、世界秩序の確立・維持を謳い、強い支持を獲得しようという大統領の 'rhetorical strategy' の一部を構成していることを明らかにした。

##### 「歴代米国大統領就任演説における統語構造の変異」

講師 後藤一章（摂南大学）

コーパス言語学における計量的なアプローチは、今や有力な一分析手法として確立されている。特に、言語解析技術の発達に伴い、従来は単語レベルに留まっていた複雑な統計分析が、句や構文といったより高次の統語レベルにおいても適用され始めている。

本発表ではこうした現状を踏まえ、歴代米国大統領就任演説を対象に、各就任演説において特徴的に見られる統語構造の実態や変異を統計学的に分析した。その結果、語彙レベル同様、統語構造レベルにおいても、年代による明確な統語構造の変異が観察された。特に、

現代の演説ほど後置修飾の減少や句動詞の増加といった傾向が見られ、より平易かつ口語的な統語構造へ推移している可能性が提示された。

### 「言語研究と統計：記述と推測」

講師 前田忠彦（統計数理研究所）

統計学の初学者がつまづきやすい推測統計学の話題として、統計量の確率分布（標本分布）という概念や統計的仮説検定の論理を紹介し、推測統計学を理解において、前者すなわち標本分布の概念の重要性を強調した。これは母集団からの無作為抽出の結果として実現する標本の組ごとに、母数の推定量としての統計量の値が異なることを指し、この概念に推測統計学の主要な仕掛けが含まれている。また仮説検定の論理においては、判断の当否について2種類の過誤を含む2×2のケースがあることの意味が重要である。言語現象を量的に記述する研究においても推測統計学の活用は必須である。

本シンポジウムの趣旨は、統計学的アプローチによってポリティカルディスコースの諸特徴を浮き彫りにすることであった。上述したように、各講師がそれぞれの題材に対して独自の分析方法論と知見を示す一方、前田講師には言語研究と統計の関係について、専門的立場からの見解を提示してもらった。題材をポリティカルディスコースに限定したものの、コーパスへの統計学的アプローチの現状と課題について考察する契機となったのではないだろうか。

田畑智司（大阪大学）

### ハンドアウトのダウンロードサービス

第33回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより6月30日までとします。ファイルはPDFとなっております。ご希望の方は、石川保茂 (yasuishikawa@hotmail.com) まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追ってURLをお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

※以下、講師・発表者の敬称は略させていただきます。

1. 田中省作「 $\chi$ 二乗検定再入門」（レジュメ）
2. 田中省作「 $\chi$ 二乗検定再入門」（プレゼン資料）
3. 小林雄一郎「 $\chi$ 二乗検定再入門」
4. 岡田 晃「Piers Plowman における否定接頭辞 in- と un- の考察」
5. 住吉 誠「動詞 take が現れる Retroactive Gerund 構文の分析：BNC を利用して」
6. 村上 明「多次元分析による日本とアジア諸国

の英語教科書研究」

7. 能登原祥之「日本人英語学習者のイベントスキーマと文型への親密度：JEFL Corpus の分析を通して」
8. 中條清美・西垣知佳子「パラレルコーパスを活用した学習者中心の英語授業」
9. 高見敏子「語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語」
10. 石川慎一郎「コーパスに基づく批判的談話分析：首相官邸英文メールマガジンの量的語彙解析」
11. 田畑智司「多変量アプローチで俯瞰する歴代米国大統領就任演説の言語変異：Washington から Obama まで」
12. 前田忠彦「歴代米国大統領就任演説における統語構造の変異」
13. 後藤一章「言語研究と統計：記述と推測」

### 会誌『英語コーパス研究』第17号論文募集

『英語コーパス研究』第17号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。なお、下記の書式に合わせたMS-Wordテンプレートファイルを準備する予定です（書式の設定にご注意ください）。下記ホームページよりダウンロードしてご使用ください。

#### 【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

#### 【投稿申込締切り】2009年7月31日（金）

（氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先までお知らせください。）

#### 【原稿提出締切り】2009年9月30日（水）

ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名（ふりがな）、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙（1部）を添付のこと。

#### 【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40  
日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡  
TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336  
email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

#### 【原稿の長さ】

1. 研究論文  
和文 A4 サイズ 1ページあたり 35字×30行、17枚以内  
英文 A4 サイズ 1ページあたり 70ストローク×35行、17枚以内（10.5ポイント使用）

(いずれも Abstract (英文), 図表, 注, 書誌, 付録を含む。)

## 2. 研究ノート

1 ページあたりは上記の書式と同様で, 12 枚以内。

(いずれも Abstract (英文), 図表, 注, 書誌, 付録を含む。)

## 3. その他

研究論文の半分以下。

【書式】第 16 号所収の論文を参考にしてください。詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>) でご確認ください。

【採用通知】11 月頃

【刊行予定】2010 年 5 月

この 7 月末に設けられた投稿申込締切りへの募集の有無に関わらず, 9 月末の原稿締切りまでに投稿頂ければ, 会誌への投稿は可能です。

なお, 本ニューズレターとともに, 『英語コーパス研究』第 16 号が同封されています。既報の通り, 第 16 号には 2 点の論文が採択されました。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長  
塚本 聡 (日本大学)

### 今後の大会日程と開催校

第 34 回大会 10 月 3 日 (土) 青山学院大学  
第 35 回大会 4 月 (土) 兵庫県立大学  
第 36 回大会 10 月 (土) 東京大学 (駒場キャンパス)

### 第 34 回大会の日程と研究発表募集

2009 年度の秋期大会 (第 34 回大会) は 10 月 3 日 (土) に青山学院大学 (青山キャンパス) で開催される運びとなっております。JR 山手線, 東急線, 京王井の頭線「渋谷駅」宮益坂方面の出口より徒歩約 10 分, 地下鉄「表参道駅」B1 出口より徒歩約 5 分という好立地です。是非, ふるってご参加ください。会長, 大会準備委員, 事務局ともどもお待ちしております。

ML でもご連絡いたしますが, 大会での研究発表を次の要領で募集いたしております。発表を希望される方は, 下記の要領に従って, 電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること。

【内容】本学会にふさわしい, コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。

【応募方法】冒頭に題名を記し, 800 字~1200 字 (参考文献表は枚数に含めない) にまとめ, 事務局まで添付ファイルで送付のこと。メール本文には氏名 (ふりがな), 所属・職名, 住所, 電話番号, 電子メールのアドレスを明記すること。

【応募締切り】2009 年 6 月 26 日 (金) 必着

【採否決定】2009 年 7 月下旬 (予定)

【発表時間】発表 20 分+質疑応答 10 分

### 人事に関する決定事項について

大会前日の 4 月 24 日午後 5 時 30 分より開かれた運営委員会において人事案が審議されました。まず, 2 年間事務局長として英語コーパス学会の発展に大いに貢献されてきた山崎俊次先生 (大東文化大学) がこの 3 月で退任され, 赤野会長と任期が合致する 1 年間を任期として, 新しく副会長に就任されることとなりました。山崎先生の事務局長としての 2 年間のご尽力に対し深く感謝申し上げます。また, 新しく事務局長には井上永幸 (徳島大学) が就任いたしました (一期 2 年間)。宜しくお願ひ申し上げます。次に, 運営委員の継続に関してですが, 今年度継続中である 5 名の先生方 [新井洋一先生 (中央大学), 岡田毅先生 (東北大学), 高橋薫先生 (豊田高専), 塚本聡先生 (日本大学)] を除いた全員 (17 名) の運営委員としての留任が承認されました。また, 昨年度末をもって学会運営委員を定年になられた元会長の今井光規先生 (摂南大学) が顧問となりました。会計には石川保茂先生 (京都外国語短期大学) にもう一期 (2 年間), 会計監査には梅咲敦子先生 (立命館大学) にもう一期 (2 年間) をそれぞれご担当いただくこととなりました。学会賞選考委員として長年担当された西村秀夫先生 (姫路獨協大学) の後任に鈴木敬了 (敬了) 先生 (大東文化大学) が担当されることになりました。編集委員会, 東支部の委員は全員留任です。

### 学会賞について

3 月 31 日に締め切りました今年度の学会賞には 1 件, また奨励賞には応募がありませんでした。今年度秋の大会で結果を発表すべく現在選考委員会で鋭意審査中です。

学会賞選考委員会委員長  
投野由紀夫 (東京外国語大学)

### 東支部活動報告

東支部では昨年度より, 支部長が新井洋一先生 (中央大学) から投野由紀夫 (東京外国語大学) に交代しました。東支部では関西地区よりもまだ学会員が少ないため, 引き続き裾野を広げる啓もう活動を重視したいと思います。去る 2009 年 3 月 23 日 (月) には, 東京外国語大学を会場に, 初心者向けのツール講習会を行いました。約 10 種類くらいのコーパスツールの概要を把握するという 1 日講習会に, 塚本聡氏 (日本大学), 石井康毅氏 (東京理科大学), 小林雄一郎氏 (法政大学非常勤講師), 金田拓氏 (東京外国語大学院生), 村上明氏 (東京外国語大学大学院生), そして投野といった学会員がインストラクターとして参加。受講者も 15 名を数えました。初心者の方が多く, 新井洋一先生が英語コーパス学会の PR も行って, 大変よいコーパスを用いた研究方法紹介の機会となりました。今年度は, ツール講習会の継続, 東支部独自の 1 日講演会や, 可能であれば運営委員の先生方と相談しながら, 東支部

の会員を中心とした読書会なども組めればと考えています。引き続き、応援よろしく願いいたします。

東支部支部長  
投野由紀夫（東京外国語大学）

### 新入会員紹介（5月14日現在、Sは学生）

荒木瑞夫	宮崎県立看護大学
大久保政憲	千葉工業大学
川瀬義清	西南学院大学
後藤隆昭	熊本大学 S
後上雅士	東京外国語大学大学院 S
長 加奈子	北九州市立大学
友次克子	静岡理科大学
鳥飼慎一郎	立教大学
渡邊容子	群馬県立県民健康科学大学

### 事務局から

#### ◇会則の改正

会則が一部改正になりました。新しいものを同封しておりますのでご覧ください。

#### ◇会費納入のお願い

2009年度会費（一般5,000円、学生3,000円）を郵便局にある払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川保茂（〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学）までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。過年度会費未納の方は、2009年度分と併せてお納めください。また、住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

なお、会誌『英語コーパス研究』第16号は2008年度の会費を納入していただいた方にのみ、送付いたしております。また、2年続けて会費未納の場合、Newsletterなどの送付を中止させていただきます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



## FORUM

### ■新刊紹介

堀 正広（熊本学園大学）

hori@kumagaku.ac.jp

A.P. Cowie 編『慣用連語とコロケーション コーパス・辞書・言語教育への応用』（くろしお出版、2009）（監訳 南出康世・石川慎一郎）A5版、327頁、3,800円＋税。ISBN：978-4-87424-441-8



先月、標記の翻訳書が「関西英語辞書学研究会」によって刊行された。原著は1998年に出版された *Phraseology: Theory, Analysis, and Application* (Oxford University Press) (以下 *Phraseology*) である。編者の A.P. Cowie は英国 Leeds 大学の名誉准教授で、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* 第4版（1989）の編集主幹を務めた。辞書学研究では中心的な役割を果たしている研究者で、最近では Cowie 編集の2巻本 *The Oxford History of English Lexicography* (2008) を出版している。

phraseology とは、慣用表現、定型表現、コロケーション、イディオムなどの慣用的に使用される表現を包括する用語である。本翻訳書では、phraseology の訳語として「慣用連語」を使用しているの、本紹介文では原著に言及する場合は *Phraseology* とし、用語 phraseology に言及するときは「慣用連語」を使用する。括弧内の引用箇所は翻訳書の頁数を表している。

原著 *Phraseology* は、本書に収められている論文の概要と解説である第1章の序論（A.P. Cowie）を除くと、4つのパートからなり、各パートには2~3本の論文が収められている。4つのパートは、第1部「理論的視野：ロシアの伝統、文化的要素」、第2部「書き言葉・話し言葉コーパスにおける慣用連語」、第3部「特別な目的のための言語および外国語学習者の言語における慣用連語」、第4部「慣用連語と辞書」である。

第1部には2本の論文がある。第2章「コロケーションと語彙関数」（Igor Mel'čuk）と第3章「文化の言語としての慣用連語：集団の心性表象におけるその役割」（Veronika, et al.）である。第2章では、論理学を応用した語彙関数という仕組みを創り出し、「厳密に、系統的に、包括的にコロケーションを記述する」（38頁）ことを目的としている。第3章は、慣用表現と文化の問題を扱い、次の5つの視点から論じている。1) 文化的意味素、2) 文化的概念、3) 文化的暗示的意味、4) 文化的背景、5) 談話的ステレオタイプ。文化的連想の例

を1つだけ示すと、to swing one's skirts (1998: 61) を表すロシア語は、目的もなくうろつき回るのはまともな女性ではないという文化的な価値判断から「身持ちの悪い女」(76 頁) が暗示されるという。このように語義的な意味とは別の文化に根ざした連想や暗示的な意味が生ずる場合、これを文化的連想による意味として扱っている。

第2部には2本の論文がある。第4章「英語における句語彙素の頻度と形態」(Rosamund Moon) と第5章「英語の話し言葉における慣用連語: 反復生起する語結合の証拠」(Bengt Altenberg) である。第4章は、句語彙素、つまりイディオム・諺・直喩・慣習化されたメタファー・定型表現・格言などの慣用連語が大型コーパスにおいてどの程度の出現頻度であるか、テキストジャンルとの関係性はどのようなものなのかを量的に調査したものである。結論として、さらに巨大コーパスでの検証が必要だが、本章で扱った句語彙素の大半が低頻度であり、ジャンルごとのはっきりとした志向性があると結論づけている。第5章は、London-Lund Corpus を使って、話し言葉における慣用連語の出現頻度を調べている。結論として、慣用連語の出現頻度は高く、固定的な形ではなく一定の多様性があることを指摘している。

第3部には3本の論文がある。第6章「ジャンルの観点から見る慣用連語単位のスタイル上の可能性」(Rosemarie Gläser), 第7章「上級英語学習者のライティングにおける既定パターン」(Sylviane Granger), 第8章「学習者のアカデミックライティングにみる慣用連語」(Peter Howarth) である。第6章では、慣用連語単位を下位区分し、科学記事・学術論文・教材・広告・小説のテキストジャンルにおいて慣用連語単位がどのように使われているかを分析し、それぞれのジャンルにおいて異なった使われ方が見られることを明らかにしている。第7章では、国際学習者コーパス(ICE) を用いて、フランス人英語学習者の慣用連語、とくに強意詞コロケーションの使用状況を調査し、慣用連語の習得における学習者の母語の影響を指摘し、慣用連語習得における提言を行っている。第8章は、学術論文において母語話者而非母語話者の慣用連語、とくにコロケーションの逸脱を調査した論文である。逸脱は非母語話者に多く、逸脱には重複と混合という2つのタイプがあり、混合は母語話者の言語能力を反映していると結論づけている。

第4部は第9章「辞書の見出し語項目からの重要語彙関数の発見」(Thierry Fontenelle) と第10章「慣用連語辞書: 東欧と西欧の比較」(A.P. Cowie) の2本の論

文から成っている。第9章は、Collins-Robert English-French Dictionary のような2言語辞書の機械可読形式版が、コロケーション情報の自動抽出可能なコロケーション・データベース構築の出発点として利用可能であることを示している。データベースには語彙関数の情報が付与され、中心語と共起語の意味関係が詳しく分析できる。このようなデータベースの潜在的な可能性も論じている。第10章では、ロシアと英国の慣用連語研究の2つの潮流を整理し、それぞれの潮流から生まれた代表的な慣用連語辞書を紹介している。

以上が、本書の概要である。本書は、翻訳に際してさまざまな工夫がなされている。まず、原著にはない工夫として、各章の始めに要約がつけられている。各章の内容理解に大いに役立つ。原著の脚注が本文に組み込まれているので、読みの流れが中断されることなく内容が理解しやすい。訳語の工夫が至る所に見られる。たとえば、phraseology は現在日本語で定着した用語はないと思うが、本書は「慣用連語」という新しい用語を造り出した。複数の翻訳者による翻訳作業で厄介なことの1つは訳語の統一である。監訳者は、まず各章の担当者に術語とその訳語一覧を提出してもらい、訳語表を作成し、各翻訳者に訳語表を配布して、それにしたがって翻訳作業を進めてもらったという。

本書をきっかけに日本における phraseology 研究がこれまで以上に盛んになるであろう。ちなみに、Phraseology 2009 in Japan が7月11日(土)に関西学院大学上ヶ原キャンパスで開催されるそうである。次のサイトをご覧ください。

(<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~KEGBK/phraseology%202009.html>)

関西英語辞書学研究会で輪読用テキストが翻訳出版されたものは本書が3冊目である。2002年にHoward Jacksonの*Lexicography: An Introduction* (Routledge, 2002) が『英語辞書学への招待』(大修館)として、2006年にはMichael Stubbsの*Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics* (Blackwell, 2004) が『コーパス語彙意味論 語から句へ』(研究社)として刊行されている。次のテキストはThierry Fontenelle (ed.) の*Practical Lexicography: A Reader* (Oxford: OUP, 2008) とすでに決まっているとのこと。研究会の地道な活動の成果が日の目を見る数年後が楽しみである。

最後に、監訳者以外の翻訳者は、小原金平、森口稔、田中美和子、中根貞幸、石川有香、関山健治、甘粕啓子、西川真由美、夏目和子の方々である。

# 英語コーパス学会 Newsletter

Sept. 1, 2009

No. 66

■会長:赤野 一郎  
■事務局:〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 井上永幸研究室内  
■TEL:088-656-7125 ■振替口座:00940-5-250586(英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■email: [inoue@ias.tokushima-u.ac.jp](mailto:inoue@ias.tokushima-u.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 34 回大会のご案内

英語コーパス学会第 34 回大会は、10 月 3 日(土)、青山学院大学青山キャンパス(〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 <http://www.aoyama.ac.jp/>)で開催されます。会場となる青山キャンパスは JR 山手線、東急線、京王井の頭線「渋谷駅」宮益坂方面の出口より徒歩約 10 分、または地下鉄「表参道駅」B1 出口より徒歩約 5 分のところにあります。事前に経路と時刻をご確認ください。宿泊を必要とされる方は早めの予約が肝要かと思われまます。なお会場校の責任者である染谷泰正先生には準備段階からご尽力いただき深く感謝致します。

詳細は、同封の「大会資料」をご覧くださいの ですが、恒例になりました午前中のワークショップのほか、午後には研究発表 6 件とシンポジウムがあります。

午前中のワークショップでは、会場校の責任者でもある染谷泰正先生(青山学院大学)に、「オンライン版『英文語彙難易度解析プログラム』(Word Level Checker)の利用法およびその教育研究分野への応用」と題して、教材の難易度を客観的に測定するための支援ツールとして開発された表題のオンラインプログラムについて、各種機能及び具体的な使用法や教育研究のさまざまな場面への応用をご紹介します。

研究発表については、運営委員の査読を経て準備委員会での最終的な審査を行った結果、次の 6 件の発表が決まりました。西原史暁氏(東京大学大学院生)の「低頻度共起でのコロケーション強度を表す指標」、小島ますみ氏(名古屋大学大学院生)の「新しい lexical richness 指標の提案:学習者の産出語彙における頻度情報に着目して」、田中省作氏(立命館大学)・富浦洋一氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)・安東奈穂子氏(九州大学大学院法学研究院)・柴田雅博氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)の「Web を源とした英語科学論文コーパスの構築—技術的方法論と法的観点からの検討—」、後藤隆昭氏(熊本大学大学院生)の「地域発信用英語コーパスの 4-gram 分析—事例研究:「かながわ見聞録」に学ぶ定型表現—」、三木望氏(大阪大学大学院生)の「日本人英語学習者の causality の習熟度:パラレルコーパスの分析を通し

て」、高橋薫氏(豊田工業高等専門学校)・白井翔悟氏(プログラマー)の「BNC サブコーパスの統語構造上の特徴分析」で、2 室に分かれての研究発表となります。

シンポジウムは、新井洋一氏(中央大学)の司会の下、「フリーオンラインコーパスの活用と英語学研究:BYU-Corpora を中心に」と題して、複数のオンラインコーパスについて整理・概観した上で、特に BYU Corpus を中心に据えて、各講師にそれぞれ異なる専門分野の立場からご発表いただきます。まず、司会の新井洋一氏に「フリーオンラインコーパス概観」と題してご発表いただき、次に、林裕氏(関東学院大学)が「ANC との比較による BYU-COCA の活用と研究事例」、続いて山崎聡氏(千葉商科大学)が「BYU-OED の特徴と BYU-OED を利用した研究事例」、最後に新井洋一氏が「イギリス英語のオンラインコーパスと BYU-BNC に基づく英語学研究」のタイトルでそれぞれ発表されます。

以上のように、今回は、英文講読教材の難易度を客観的に測定するための支援ツール WLC に関するワークショップ、それに統計値、コーパス構築と著作権、表現研究、英語教育といった 6 件の研究発表、さらにフリーオンラインコーパスの英語学研究活用をテーマとしたシンポジウムと盛りだくさんの内容となっておりますので、多数のご参加を期待しております。

午前中のワークショップに参加ご希望の方は郵便・電子メール(件名「ワークショップ申込」)で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局までお申し込みください。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

## 会誌『英語コーパス研究』第 17 号について

次回刊行の『英語コーパス研究』第 17 号への投稿を 9 月 30 日締め切りで受け付けております。たくさんのご応募をお待ちしております。現時点で、論文 9 点、書評等 1 点、その他(シンポジウムなど)1 点の申し込みを受けております。

学会ホームページ内「投稿規定」ページに、投稿用書式に合わせた MS-Word ファイルを準備しました。書式(スタイル)のみを設定した空のファイルをアップ

ロードしてあります。適宜ダウンロードし、ご活用ください。(このファイルを使用せず、ご自身で設定することも可能です。)

【原稿提出締切】2009年9月30日(水)

ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙(1部)を添付のこと。書式など詳細については、ホームページをご覧ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文学部英文学科 塚本 聡

TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336

email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

『英語コーパス研究』編集委員長 塚本 聡

### 2010年度の大会日程と開催校

第35回大会 4月24日(土) 兵庫県立大学

第36回大会 10月(土) 東京大学(駒場キャンパス; 日程未定)

### 新入会員紹介 (8月20日現在, Sは学生)

井上 聡	神戸大学 S
川崎修一	日本赤十字看護大学
竹田敦子	
長 加奈子	北九州市立大学基盤教育センター
中谷安男	東京理科大学
西原史暁	東京大学大学院 S
光田幸子	立命館宇治高等学校

The Language Training & Testing Center

### 寄贈刊行物の紹介

堀 正広 (2009) 『英語コロケーション研究』 研究社。  
清水 眞 (2009) 「サンプリングコーパスにおける英語再帰形の分布」 『東京理科大学紀要(教養篇)』 第41号, pp. 189-203.

### 事務局から

#### ◇会費納入のお願い

2009年度会費(一般5,000円, 学生3,000円)を未納の方は、日本郵便にある払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。別途領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2009年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第16号は

2008年度の会費を納入していただいた方のみ、送付いたしております。また、2年続けて会費未納の場合、Newsletterなどの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

### ◇会誌『英語コーパス研究』第1号～第15号収録CDについて

2009年度新入会員の方には、会誌『英語コーパス研究』第1号から第15号を収録したCDを同封しております。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## FORUM

### ■CL2009 報告

高橋 薫 (豊田工業高等専門学校)

takahasi@toyota-ct.ac.jp

隔年開催として前回のバーミンガム大学より今年はリバプール大学に会場を移しての開催となった Corpus Linguistics 2009は、7月20日のワークショップに始まり4日間の日程で開催され、参加者385名と大規模な大会となった。研究発表は、テーマ別に10会場で開かれ、昨今のコーパス研究の多様性が以下の項目より伺える。

Corpus Compilation / Dictionaries, Terminology / Tools, Software / Applications / Grammar, Syntax, Morphology / Contrastive Corpus Linguistics / Learning, Teaching / Specialised Corpora / Metaphor / Discourse Studies

日本人としては、投野由紀夫先生が Web Corpora の発表に関する司会者を務めるなど、10数名の参加があり、回を重ねるごとに日本からの参加者も増える傾向にある。以下に英語コーパス学会の会員の発表者(敬称略)をタイトルと共に挙げる。

石川慎一郎 (Use of modal verbs by Japanese learners of English: A comparison with NS and Chinese Learners), 石川有香 (Corpus-based study on gender-specific words), 岡田毅・他1名 (DBMS and flexible POS tagging for EFL learners and researchers), 清水眞 (On the distribution of English reflexives), 投野由紀夫 (Toward automatic error identification of learner corpora: A DP-matching approach), 中條清美・アンソニーローレンス, 他1名 (DDL for the EFL classroom: Effective uses of a Japanese-English parallel corpus and the development of a learner-friendly, online parallel concordancer)

また、poster session として、堀田秀悟・中村純作 (A corpus study of lay-professional communication in criminal court), さらには、work-in-progress として、三浦愛香 (An analysis of Japanese EFL learners' use and

management of discourse strategies across different proficiency levels) が挙げられる。

全体的な印象として、日本語に関する研究発表が多数あったことで、どの発表においても参加者の関心が高く、日本語研究に精通している各国の学者からの質疑応答が活発に行われた。

また、この学会の特徴のひとつに自然言語処理系の研究分野の発表も多いことがあげられる。最近の筆者の専らの関心事でもあるが、欧州のある発表者は、英語と自国語間のコロケーションに関する機械翻訳についての研究報告を行っていた。昨今の自然言語処理研究の様子を伺えるとあって、大変興味深く聞いていたが、ランカスター大学で BNC の構文解析に専心した研究者より、いっそう専門的な見地からの意見や指摘があり、翻訳精度の向上に向けての指摘はむしろ手厳しいと思えるほどの印象を受けた。いずれにしても、CL2009 は言語工学の先進的な研究の動向を見ることができ、今後も目が離せない国際会議のひとつであると感じた。

さて、海外での学会となると、準備された余興もまた別の楽しみである。まず Liverpool がビートルズ誕生の地ということもあり、ビートルズ記念館や生家巡りなどのビートルズツアーが用意され、多くの参加者がこのツアーを楽しんだ。また、ミミックバンドによる数々の名曲の演奏がディナーパーティーの会場で披露され、仮設の宴上で会員が踊りだすあたり、欧州ならではのといったところで、その中に日本人も散見することとなり心和む夕食となった。

## ■ ICAME30, ICLCE3 参加報告

岡田 毅 (東北大学)

t-okada@intcul.tohoku.ac.jp

去る 5 月 27 日から 31 日にわたって Lancaster 大学で開催された ICAME 第 30 回記念大会と、7 月 14 日から 17 日にわたって SOAS (London 大学) を中心会場で開催された ICLCE 第 3 回大会で発表の機会を与えられ参加してきた。これはその簡単な報告である。

### 【ICAME30】テーマ: Looking back-moving forward

5 月 27 日午後からの 2 つの preconference workshop では、Errors and disfluencies in spoken corpora と Corpora and SLA がトピックとして取り上げられた。前者では 8 つのペーパー、後者では 4 つのペーパーを中心にして、中間的な短い discussion と最終的な open discussion が交わされた。夕方からの opening ceremony では The history of ICAME と題して、コーパス言語学黎明期の 1950 年代にまで遡った研究の流れが Antoinette Renouf 先生の総合司会で始まった。1970 年の初頭に Lancaster Corpus を Stig Johansson 先生が引き継ぐに際しての文書の紹介や、ICAME 創立に向けて Johansson 先生、Nelson Francis 先生との間で最初に交わされたタ

イプ書きの公式文書、Nelson Francis, Geoffrey Leech, Stig Johansson, Arthur Sandved, Jan Svartvik の (豪華) 連名で Oslo 大学において 1977 年 2 月 12 日に公開された ICAME (当時は International Computer Archive of Modern English) の創立趣意書などの紹介もあった。創立趣旨の項目 (3) に、compiling an archive of corpuses to be allocated at the University of Bergen, from where copies of the material could be obtained at cost というように corpus の複数形が corpora ではないところが興味深かった。(大会全日を通して、ICAME で実際に用いられたパンチカード、磁気テープ、8 インチフロッピーディスクなどがロビーに展示され、そもそも USB メモリしか知らないという若い世代の参加者の好奇心を集めていた) 開会行事の締めくくりとして、ICAME 大会の 30 回目を記念したケーキにロウソクが灯され、Christian Mair 先生と Renouf 先生が「仲睦ましく」入刀されて参加者全員で記念大会の開会を祝った。(この前に多くの参加者が John Sinclair 先生の逝去を悼んだことも事実である)

翌日からの大会には 199 名の参加者があり、Lancaster, Oslo, Bergen と名前をつけた Lancaster House Hotel の 3 会議場と Dalton Suite room を発表会場に、Bowland Suite room を基調講演、総会、ディナー会場にして、4 つの基調講演とともに、約 140 本の full paper, 21 本の work-in-progress report, 27 枚のポスターが発表された。4 部屋でのパラレルではあったが、3 日間では収まらずに、4 日目の土曜日午前中までタイトで正確なスケジュールでの発表が続けられた。この裏には大会運営を統括した Sebastian Hoffmann 先生の手腕が光っていた。(彼は来年「ドイツへ帰る」そうである)

できるだけ多くの研究発表に参加したが、4 部屋での発表内容の範疇分けがやや緩やかで、例えば歴史的コーパスの研究発表を続けて聞きたい場合には、会場間を大急ぎで移動しなければならないという慌たじさを感じられた。報告者自身は、汎用的なコーパス解析システムと EAP のような特定領域における構文情報



Tottie 先生, Leech 先生と coffin stone の上で

抽出処理の問題に繋がる発表を中心にして発表を聞いたが、解析ソフトウェアの開発も手掛ける Boston 大学の Gregory Garretson 氏の *Introducing corpus-derived profiles: A framework for analysing word relations* と題した研究発表が示唆に富んでおり興味深かった。特に EAP において lemma を中心語に据えた collocation をとつても、そこから実際の用法や構文に関する情報を得られることは少なく、また collocation の scope も慎重に設定しないと有益な調査にはならないという主張であった。

反対に、オーストラリアやニュージーランドの英語に米国英語、英国英語の影響がどのように現われているのかを、5 種類の構文を取り上げジャンル別に分析しようという意欲的な試みであるにも関わらず、パワーポイントスライドがないのにハンドアウトが粗雑で、発表の時間コントロールも不十分な発表もあった。一方で、Lancaster 大学の気鋭講師である Andrew Hardie 氏のデモプレゼンテーションは極めて新鮮で刺激的なものであった。複数のコーパスをまたいでの統一的な解析が提供され、metadata に対してユーザーの指定を柔軟に許すことから subcorpora を自在に構築できる汎用性の高いシステムが披露された。現在では demo を稼働できないかもしれないが、是非一度 <http://cqweb.lancs.ac.uk/> を参照されることをお勧めする。

好天続きの大会 3 日目の午後には Lake District への excursion があり、夕方からは Windermere 湖上のボートでのディナーが開催された。Lake District ではいくつかの walking course が設定され、希望に沿った walking が楽しめた。報告者は昔からの念願であった coffin path walk (Grasmere 湖周辺) を 3 時間以上にわたって Johansson 先生、Leech 先生たちと楽しんだ。大会終了直後の Scotland まで足を伸ばした Ruthwell Cross 観光も含めて、実はそのほとんどが Leech 先生の企画運営によるもので、walking 中はもとより往復のコーチの車内でも Leech 先生はすばらしいガイド役を務められた。夜にはホテルのホールで Leech 先生の Carmen のピアノ演奏に Matti Rissanen 先生が唱和するという、いかにも ICAMEらしい(?) 場面も見られた。

記念大会は最優秀ペーパー賞を報告者の友人でもある Lancaster 大学の若い研究者 Neil Millar 氏に贈呈し、2010 年の大会をドイツの Giessen 大学で 5 月 26 日から 30 日に開催することを決めて閉会した。今回の大会の詳細は <http://www.icame30.info/> を、次回大会の予定は <http://www.uni-giessen.de/cms/faculties/f05/engl/ling/icame2010?language.syn> を参照されたい。ICAME30 でも、翌月の ICLCE3 でも講演された Johansson 先生のご健康が少し気になった数日間であった。

**【ICLCE3】テーマ：Current change in the English verb phrase**  
UCL と London 大学 Queen Mary が組織し、London 大

学 Institute of English Studies が主管する形の The 3rd International Conference on the Linguistics of Contemporary English は、7 月 14 日の preconference symposium から 17 日にわたって開催された。Survey of English Usage Symposium では Bas Aarts 先生、Leech 先生、Johansson 先生らが討論の場を提供され、David Crystal 先生の *Surviving Surveying* と題した基調講演が行われた。翌日からは 4 つの招待講演と、151 名の参加者による SOAS の 2 部屋、Senate House の 2 部屋に分かれるパラレル形式での研究発表が行われた。

それらの内容は SEU を象徴するように、書き言葉・話し言葉にまたがる英語の多様性に関する通時的・共時研究、高度に理論的な研究、ESL / EFL 教育などに分かれたが、多くの異なる研究フレームワークに基づいた研究にはコーパスの利用が前提となっており、ICE-GB や BNC や BASE / BAWE などの大規模な既存コーパスはもとより、個人研究者が集積した特殊コーパスなどが頻繁に言及された。しかし特に後者タイプのコーパスの構築や設計には、安易で汎用性に乏しい側面が散見されたのも事実である。例えば、翌週の CL2009 でも同様の研究発表を行ったドイツの若い大学院生の printed advertisements にみられる頻出動詞の分析は相当深刻な問題を内包していた。すなわち、複雑に構造化され、しかも TVCM などを加えたマルチメディア・マルチコード形式で発信されている商用広告に現われる英語表現を、彼女は XML などのマークアップ言語を用いずに Unicode でコーパス化したところである。また、特定テキストに対する受け取り手のスタンスは、それ以前に接した類似テキストについての経験に左右されるし、商用広告のような特定 discourse community でも、ある種の text template が予期されており、一定の bias ないし expectancy を持って、単語のみならず、連語的、統語的、意味的、談話的な関連性を意識しながらの入力情報処理を行っているという点に問題があるのではないかと思われるのである。テキストの構造的な情報を標準化されたフォーマットで整理したコーパスの蓄積と、研究者間でのリソースの共有が強く求められる所以でもある。

前月の ICAME30 に共に参加したメンバーも少なくともなかったし、翌週の CL2009 (高橋薫先生のご報告を参照) で再会した研究者も多かった。Lancaster で報告者にアドバイスを頂き、ICLCE3 では発表の司会をして下さった Christian Mair 先生には心から感謝したい。本大会の詳細については <http://ies.sas.ac.uk/events/conferences/2009/ICLCEthree/> を参照願いたい。報告者は Lancaster, London, Liverpool と少々長い期間を過ごしてしまっただが、冷涼な英国では新型インフルエンザが猛威をふるい続けていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## ■新刊紹介

赤野一郎 (京都外国語大学)  
i\_akano@kufs.ac.jp

堀 正広『英語コロケーション研究』(研究社, 2009) A5 版,  
239 頁, 3,200 円 + 税。  
ISBN: 978-4-327-40156-6



言語研究において、語と語の習慣的結合、すなわちコロケーションに対する関心が高まっている。Newsletter No. 65 の FORUM で紹介された『慣用連語とコロケーション』もその現れの 1 つである。その紹介記事の筆者である堀正広氏(熊本学園大学)が、長年の研究成果を踏まえ、英語コロケーションに関する包括的な解説書を上梓されたので、紙幅の許す範囲で紹介したい。

本書は、2007 年 1 月に名古屋大学大学院国際開発研究科で氏が行った講演「コロケーション研究の過去・現在・未来: 英語教育, 英語史, 文体」が土台になっており、序論を含め以下の 8 章からなっている。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 コロケーションと英語教育
- 第 3 章 コロケーションと英語史
- 第 4 章 コロケーションと文体
- 第 5 章 コロケーションと創造性
- 第 6 章 コロケーションとコーパス
- 第 7 章 コロケーション研究の歴史
- 第 8 章 これからのコロケーション研究

第 1 章では、最初に具体例に基づきコロケーションがカバーする範囲をわかりやすく解説、次いでコロケーションを「語と語の間における、語彙、意味、文法などに関する習慣的な共起関係」と定義し、Hoey (2005) の刷り込み理論の紹介を経て、コロケーションと文化の関係および歴史的变化に言及、2 章以降で詳述される関連領域とコロケーションの関係が俯瞰される。

第 2 章では、最初に、英語教育におけるコロケーションの位置づけを行い、コロケーション学習の有効性を、類義語、多義語、-ly 副詞の学習を例に論じる。次いでコロケーションの視点から学校現場に対して何を教えるべきかについての提言を行い、NICE, JEFLL Corpus に基づく日本人学習者のコロケーションに関わる誤用分析を踏まえ、中学段階からコロケーションに着目した語彙指導を行うことや、日本語の干渉によるコロケーションの誤用を集めたりリストの作成、日本人のためのコロケーション辞典の編纂が提案されている。

第 3 章では、英語史におけるコロケーション研究の

不十分さを指摘し、英語史としてのコロケーション研究のあり方を論じている。分析例として、terribly のコロケーションの史的变化を語彙・文法・意味の面から提示する。後半では時代を限った共時的な観点からのコロケーション研究 10 編と、通時的な面からのコロケーション研究 8 編が紹介され、最後に英語史としてのコロケーション研究の可能性を論じ、その中でジェンダーとコロケーションの史的变化なども採りあげられている。

第 4 章は全体の 70 ページを占め、第 4 回英語コーパス学会賞受賞の *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis* (2004, Palgrave Macmillan) の著者ならではの充実した内容で、本書の白眉と言えよう。受賞作が英語で書かれていたので、読者が限られていたが、そのエッセンスが本書で紹介され、広く一般の英語の研究者や教師の目に留まることになったのは喜ばしいことである。

第 1 節でレジスター(法律文書、広告英語、話し言葉、学術論文など)に見られるコロケーションの相違が解説され、第 2 節で McIntosh (1966) の 4 つのコロケーションの型(標準的なコロケーションと標準的な文法、通常でないコロケーションと標準的な文法、標準的なコロケーションと通常でない文法、通常でないコロケーションと通常でない文法)の枠組みを紹介する。第 3 節では、その枠組みを援用し、Hori (2004) の 2 章と 3 章をベースにコロケーションから見た Dickens の文体分析が提示される。その手法は The Dickens Corpus (460 万語) と Nineteenth-Century Fiction without Dickens (NCFWD) を照合し、Dickens のコロケーションパターンに見られる頻度の逸脱性をみる。NCDWD に比較して Dickens Corpus において際立って多いコロケーションは、Dickens の好むコロケーションということになる。具体的には名詞、形容詞、-ly 副詞が採り上げられる。特に小説においては、登場人物の行動を描写する様態副詞が多い点に着目し、-ly 副詞の詳細な分析(thoughtfully, I said+-ly, look+-ly, heartily, gravely)がなされており、特に筆者の興味を引いた。引き続き第 4 節では、McIntosh の第 2 の型、通常のコロケーションパターンから逸脱したケースに絞り、Dickens の文体の創造性を探る。その分析結果は、比喩によるコロケーション、転移によるコロケーション、矛盾したコロケーション、異質要素のコロケーション、慣用句を修正したコロケーションの 5 つのタイプに分類される。

特定の語彙集団との共起関係を semantic prosody というが、第 5 節では、*David Copperfield*, *Great Expectations*, *Bleak House* のそれぞれの登場人物の語りに見られる 'I was so' の semantic prosody が分析される。'I was so' は主語の感情や心理を表す語と共起し、通例 positive と negative の両方の語が生じるが、これらの作品中では、negative な傾向があることを例証し、3 人の語り手の心理面からの共通点と相違点が示される。

第6節では機能語のコロケーションが扱われる。一般にはコロケーションは内容語に関して論じられることが多いが、機能語のコロケーション分析を通して、作家の文体を特徴付けができるとする。Hemingwayの短編小説“Hill Like White Elephants”における定冠詞 the の使い方の男女差と、the のコロケーションの違いに二人の考え方の違いや、男女の心のすれ違い見てとる。さらに *David Copperfield* に現れる ‘A but B’ おいて、何が対比されているかに着目し、but のコロケーションによる人物描写の効果を指摘する。

第5章では、普通の語どうしが新たな組み合わせによって今までにない表現効果を生み出す、言葉の創造性について、英語のみならず日本語にも分析対象を広げて論じられている。採り上げられている題材も幅広く、詩 (T. S. Eliot, Shakespeare, 北村太郎, 谷村俊太郎, 大岡信), 俳句 (種田山頭火, 金子兜太, 星永文夫), 演歌 (阿久悠) と J-POP (スキマスイッチ), 広告 (チョコレートの広告に見られる「大人」「贅沢」「口どけ」の多用) に見られる新奇なコロケーション例を豊富に示しつつ、表現効果の解釈が説得力をもってなされている。

第6章では、コーパスを用いたコロケーション研究の手順と留意点が述べられる。研究目的に応じてどのようなコーパスを用いるか、語のコロケーションパターンを抽出するコンコーダンスの読み方、MI score, t-score, LogLog の統計値の特徴と相違などが解説される。

第7章の最初でFirth (1951) のコロケーション研究以前の研究として、Palmer (1938) の先駆性を指摘した後、Firthの歴史的意味づけとその後 (1960年代~2000年代) のコロケーション研究が、10年単位で概観される。Firthが教鞭を執ったエディンバラ大学におけるHalliday, Sinclair, McIntoshらの業績の紹介、パーミンガム大学時代のSinclairの貢献、コロケーション辞典の編纂、英語教育におけるコロケーションの扱いなどが手際よくまとめられ、最後に日本におけるコロケーション研究が概観され、著者は勝俣 (1939, 1958) を高く評価する。その前書き (「語義を示すのではなくて、語が他の語と慣習的に結合して一つの表現単位をなすその姿を広く採集し、これを文法的に配列したもので、その狙いは英語活動態 (English in action) を展示しようとするにある」) が示されているが、下線部はコロケーションの定義として現代でもそのまま通用し、その先駆性は世界的に評価されるべきである。

最終章の第8章は、序論から7章で論じたことを振り返りながら、今後のコロケーション研究の問題点と

課題を提示しつつ、その可能性を論じている。理論面ではコロケーションの定義とコロケーションとイデオムの関係はさらに論じる必要があるとする。英語教育において、初級の学習者にどのような授業が可能か、また中高生を対象とした基本コロケーション辞典編纂の必要性を訴える。史的研究では、各時代のコロケーションの記述、個々のコロケーションの変化の記述、時代の変化においても変わらないコロケーションの記述がなされなければならないと主張する。文体面の研究課題として、著者は通常のコロケーションの研究とレジスター間に見られる特徴的コロケーション研究をあげる。言語の創造面におけるコロケーション研究として、ユーモアに関する研究の可能性を指摘している。最後に、コロケーション研究において欠かせないコンコーダンスの分析に関する啓蒙書の出現を要望し、比喩的コロケーション研究に適したコンコーダンスプログラムの開発の必要性を訴える。

国内外を問わず、今だかつてコロケーションに関してこれほど多岐にわたり包括的に論じられた書物はなかった。本書は、今後のコロケーション研究の必読書となるであろう。「はしがき」でも触れられているが、最後に、本年11月に大阪大学で開催される日本英語学会において、氏が司会および講師を務めるシンポジウム「これからのコロケーション研究」が以下の講師陣と内容で行われることをお伝えし、本稿を終わることにする。

「これからのコロケーション研究」堀正広

「英語史とコロケーション研究」渡辺秀樹

「コロケーションと辞書 —英和辞典を例に」赤野一郎

「文体意匠としてのコロケーション —Dickens における gentleman—」田畑智司

「コロケーションと英語教育」小屋多恵子

#### 引用文献

- Firth, J.R. (1951) “Modes of Meaning,” *Essays and Studies*. The English Association, pp. 118–49.
- Hoey, M. (2005) *Lexical Priming. A New Theory of Words and Language*. London: Routledge.
- 勝俣銓吉郎編 (1958) 『新英和活用大辞典』研究社.
- McIntosh, A. (1966) “Patterns and Ranges,” in A. McIntosh & M.A.K. Halliday (eds.) *Patterns of Language. Papers in General Descriptive and Applied Linguistics*. London: Longman, pp. 183–99.
- Palmer, H.E. (1938) *A Grammar of English Words*. London: Longman, Green and Co. Ltd.

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 67

Dec. 1, 2009

■会長:赤野 一郎  
■事務局:〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 井上永幸研究室内  
■TEL:088-656-7125 ■振替口座:00940-5-250586(英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■email: [inoue@ias.tokushima-u.ac.jp](mailto:inoue@ias.tokushima-u.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 34 回大会報告

### ■概要

英語コーパス学会第 34 回大会は、10 月 3 日(土)、青山学院大学青山キャンパスで開催されました。時折雨のはらつくはつきりしない天候にもかかわらず、JR 山手線、東急線、京王井の頭線「渋谷駅」宮益坂方面の出口より徒歩約 10 分という立地条件の良さもあって、関東地区としては過去最高の 132 名の参加がありました。

午前中のワークショップは「オンライン版『英文語彙難易度解析プログラム』(Word Level Checker)の利用法およびその教育研究分野への応用」と題して染谷泰正先生(青山学院大学)に講師を務めていただきました。WLC は主として同文学部で開講されている「英文講読」の授業に使う教材の難易度を客観的に測定するための支援ツールとして開発されたオンラインプログラムで、2006 年度から同学科のウェブサイト上で試験的に公開されています。本ワークショップでは、まず前半部(10:00-10:45)で WLC の各種機能および具体的な使用法と 2008 年度に新たに追加されたリーダビリティ評価機能について解説していただいた後、その信頼性を検証するために行った評価実験の結果についても報告していただきました。後半部(10:45-11:45)では、WLC の教育研究のさまざまな場面への応用について、参加者の関心に応じた具体的な事例を取り上げて、一連の作業を示していただきました。目標とする評価レベルに合わせたテキストの改変・編集等もでき、授業だけではなく大学入試問題の作成と品質管理への応用も可能ということで大いに関心を集めました。参加者は 54 名で、非常に有意義なワークショップであったという感想をいただきました。講師を務めていただきました染谷先生には、この場をお借りしてお礼申し上げます。

午後の大会では、まず赤野一郎会長(京都外国語大学)の開会の挨拶があり、その後、開催校を代表して西澤文昭先生(青山学院大学文学部長)にご挨拶をいただきました。引き続き学会賞選考委員長の投野由紀夫先生(東京外国語大学)から学会賞の発表と選考理由の説明があり、下記のような結果が発表されました。

## 第 8 回英語コーパス学会賞

### 学会賞

受賞者:樋口昌幸氏(広島大学)

受賞対象:『英語の冠詞-歴史から探る本質-』  
(広島大学出版会, 2009)

研究発表は、第 1 室で 3 件(コロケーション、学習者の産出する語彙の豊かさ、Web を源とした英語科学論文コーパスの構築)、第 2 室で 3 件(地域発信用英語コーパスの 4-gram 分析、日本人英語学習者の causality の習熟度、BNC サブコーパスの統語構造上の特徴分析)の発表がありました。シンポジウムでは新井洋一先生(中央大学)の司会のもと、「フリーオンラインコーパスの活用と英語学研究:BYU-Corpora を中心に」というテーマで、3 人の講師の先生方に発表していただきました。オンラインコーパスについての歴史と、現在の主要なフリーオンラインコーパスの紹介をしていただいた後、3 人の講師がそれぞれ異なる専門分野から具体的な活用事例を発表され、大変有意義なシンポジウムとなり、大会出席者のほとんどの方に参加いただきました。それぞれの司会の先生にご執筆願いました概要につきましては、「研究発表」および「シンポジウム」のセクションをご覧ください。

大会終了後の懇親会には 49 名の参加があり、金澤俊吾先生(岩手県立大学宮古短期大学部)の司会のもと、赤野一郎会長の挨拶、西村道信先生(大手前大学)の乾杯のご発声で懇親会が行われました。ワークショップ、研究発表、シンポジウムに関する更なる意見交換、会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

開催校責任者の染谷泰正先生のご尽力とご協力で盛会に終わったことを喜び、厚くお礼申し上げます。また午前中のワークショップ、大会の受付等で献身的にご協力いただいた青山学院大学の学部・大学院学生の皆様にも紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

### ■研究発表

低頻度共起でのコロケーション強度を表す指標

西原史暁(東京大学大学院生)

発表では、コロケーション指標のダイス係数 ( $Dice_{AB}=2 \cdot \text{Freq}(AB)/\text{Freq}(A)\text{Freq}(B)$ ) と相互情報量 (MI) ( $I(AB)=\log_2 P(AB)/P(A)P(B)$ ) について、50万～100万語のコーパスを想定し、50万語あたり10回以上の頻度のある bigram に関して、コンピュータ・シミュレーションと実際の言語データを用いた実験的な比較を行い、いずれの結果においてもダイス係数の方が相互情報量よりも優れていると報告された。コロケーションの結びつきの強さを計る指標として、いくつもの指標が提案されてきた中で、研究の目的やデータに合う指標を事前に選ぶことができるようにするために、まず各指標の特徴を明らかにしていく必要があるという認識に基づく研究であり、ダイス係数と相互情報量の比較はその手始めとして行われたものである。また50万～100万語というコーパスサイズは、言語変異の研究などで実際に利用できるジャンル別コーパスの大きさを想定したものである。コロケーションの指標の「良さ」は目的によって異なるが、本発表では「より大きなコーパスで得られるはずの値に近い値が小規模コーパスでも得られるか」「同じジャンルで異なるコーパスを作ったときも同じような結果が得られるか」という2つの「結果の安定性」という観点からの評価がなされた。

まず、ダイス係数と相互情報量の分布に関するコンピュータ・シミュレーションの結果が示された。このシミュレーションは4通りのコーパスサイズ(10万, 30万, 60万, 90万)において単語とコロケーションの出現確率を与えた場合の分布をみたもので、シミュレーションでは82%のデータで相互情報量よりもダイス係数の方が正規分布に近いという結果が示された。

次に、実際の言語データを用いた実験の結果が示された。英語版 Wikipedia (8億3300万語) から約68万語のサイズのコーパスを100個、重複と偏りの無いように作り、英語版 Wikipedia 全体で50万語あたり10回以上の出現頻度で、かつダイス係数・相互情報量・tスコアのいずれかで上位50位にあった112の bigram について、この3つの指標の分布を調べた結果が箱ひげ図で示され、外れ値の確率は順に1.82%, 3.91%, 4.27% ( $p < .01$ ) でダイス係数がかつとも低かったことが報告された。

高見敏子 (北海道大学)

### 新しい lexical richness 指標の提案：学習者の産出語彙における頻度情報に着目して

小島ますみ (名古屋大学大学院生)

発表では、現在の代表的な lexical richness 指標の特徴と問題点が示された後、新しい lexical richness 指標  $S$  (sophistication の  $S$ ) の詳細が紹介され、最後に実際のコーパス (NICE) の英作文テキストから算出された  $S$  の値のデータから、 $S$  の妥当性と信頼性に関する検討が行われ、 $S$  の利点が示された。

学習者の語彙使用の豊かさを測る lexical richness 指

標について、例えば Lexical Frequency Profile は結果が4つの数字なので統計処理がしにくいこと、Beyond 2000 は数百語程度のデータでは該当する語がわずかあるいは皆無になること、 $P_{Lex}$  は Daller & Xue (2007) で2群の区別ができなかったこと、などの問題を挙げ、幅広い学習者のレベルに対応するには語彙頻度区分の数が不足している可能性についての指摘がなされた。

新指標  $S$  は、より幅広いレベルの学習者に対応が可能で、学習者の使用語彙の分布全体をとらえるための指標として提案された。Meara (2005) の報告から学習者の頻度別累積使用率が  $\ln(x)/\ln(S) \times 100$  で表せると仮定する。算出方法は、学習者の算出データから連続する50語をランダムに取り出し、Nation & Beglar (2007) の BNC に基づくワードファミリーの頻度表で500, 1000, 1500, 2000, 2500, 3000語の6つの語彙頻度レベル (式中の  $x$ ) にあたる累積使用率を調べる、ということをして100回繰り返し、データに最も適合する回帰曲線となるパラメータ  $S$  を求める、というものである。

指標  $S$  の妥当性・信頼性に関しては、NICE の英語学習者と英語母語話者のエッセイコーパスを用いて次の3点の検証が報告された。(1)  $S$  は学習者の熟達度および上級者と母語話者を区別した、(2) 同一被験者のエッセイの前半と後半で  $S$  には有意差はなく、相関はあった ( $r=0.80$ )、(3) 数百語の範囲ではテキストの長さで  $S$  の値に有意な差がみられなかった。

以上を総合して、 $S$  は、テキストの長さや被験者のレベルによらず適用可能で、解釈と統計処理の容易な1つの数字で表せるスコアであり、かつ任意のレベルの高頻度語使用率を容易に推測できる (すなわち、学習者の使用語彙の分布全体が把握できる)、という利点を持つ指標であることが報告された。

高見敏子 (北海道大学)

### Web を源とした英語科学論文コーパスの構築—技術的方法論と法的観点からの検討—

田中省作 (立命館大学)

富浦洋一 (九州大学大学院)

安東奈穂子 (九州大学大学院)

柴田雅博 (九州大学大学院)

発表は大きく2つの内容にわかれ、前半では Web から英語科学論文を構築する技術的方法論と現段階での状況の紹介、後半では Web 上の著作物を収集してコーパスを構築し、(共同) 研究を行ううえで問題となる著作権に関する情報の報告がなされた。

前半の技術的方法論の部分では、Web 上から国内の学術機関の HP 上で個人が公開している英語科学論文を自動収集するシステム (論文クローラ) [接続先のサーバーの負荷を配慮した方法で1日約200編を収集可能] と、英文校正者が5段階で評価した1281編の論文のデータから得た品詞 n-gram 分布にもとづいて、集

めた論文の英文の質を Good/Poor の 2 つに判別するプログラム (G/P 判別器) [8-gram の場合 94.7% を正しく判別] の仕組みと性能が報告された。

後半の法的観点からの検討の部分では、コーパスの構築過程で考慮しなければならない問題として、(1) Web 上の論文を収集することが、「著作権」のうちの「複製権」に抵触する可能性、(2) 集めた論文に情報を付加することが、「著作権」のうちの「翻案権」と「変形権」、さらに「著作人格権」のうちの「同一性保持権」に抵触する可能性、が指摘された。現行の著作権第三十条において私的使用のための複製は認められており、第三十条に該当すればその範囲では第四十三条で翻訳・翻案等を行うことも認められると考えられるが、研究は「私的使用」であるか否かという根本的な問題があり、法学者の意見では研究組織内での実質的なデータの共有の適法性に関しては明快に説明することはきわめて難しい、という立場が大勢とのことであった。

しかし、平成 22 年 1 月から施行される改正著作権法においては、第四十七条の七「情報解析のための複製等」で、「電子計算機による情報解析[中略]を行うことを目的とする場合には、必要と認められる限度において、記録媒体への記録又は翻案[中略]を行うことができる」とされており、これによってこのプロジェクトのように情報解析を目的とした研究における論文収集(「情報解析のための記録」と論文への情報の付加(「情報解析のための翻案」)の適法性が説明可能になるとのことであった。(なお、言語研究用として公開されているコーパスの場合は「情報解析を行う者の用に供するために作成されたデータベースの著作物については、この限りでない」という但し書きに該当するとのことである。)

高見敏子 (北海道大学)

#### 地域発信用英語コーパスの 4-gram 分析 — 事例研究：「かながわ見聞録」に学ぶ定型表現 —

後藤隆昭 (熊本大学大学院生)

本発表では、地域発信英語活動のモデルとなるテキストから、n-gram の機能を利用して、地域発信活動に役立つ定型表現を抽出した試みが報告された。テキストにはバーリット・セーピンによる「かながわ見聞録」(朝日新聞・朝刊・神奈川版、約 2 万語、80 トピック)が取り上げられた。研究目的は、1) どのような定型表現がよく使われているのか、2) 他のジャンルと比べてどのような言語学的特徴があるのかを明らかにすることであった。分析には AntConc の n-gram 分析が用いられた。調査の焦点を機能面に絞り、Biber & Barbieri (2007) や Hyland (2008) の分析枠組みを参考にして、抽出された定型表現は、時間表現、場所表現、理由表現、伝聞表現、知覚表現、その他、に分類された。

結果、以下のような定型表現が抽出された。1) 場所や時間に関する語を含む表現 (例 the former site of),

2) 理由を表す構文 (the reason is (was) that), 3) 伝聞表現として reportedly を含むもの (reportedly used as) 等、4) 知覚表現として驚き (was surprised by the) や思われる (seems to have been), 感じられる (feel as if) 等。続いて、Nishina (2007) のジャンル分析との比較から、当該テキストのジャンルの特徴としては、「…の 1 つという表現」や「序数や時間を示す表現」については「新聞のジャンル」と類似し、「as if, there 構文、過去分詞、人称、場所や位置を示す表現」については「文学のジャンル」に類似しているのではないかという可能性が示唆された。

本研究の成果として、ライティング指導の際、伝聞表現などの定型表現をそのまま利用することができる。同時に、Why, Where, When を意識すること、一人称を使う場合自分の知覚を活かすこと、文学的な要素の取り込み等の示唆が得られた。研究の限界として、コーパスの代表性、分析枠組みの精度、ジャンル分析の信頼性、n-gram の教育的有効性について言及された。

中條清美 (日本大学)

#### 日本人英語学習者の causality の習熟度：パラレルコーパスの分析を通して

三木 望 (大阪大学大学院生)

本発表では、従来、翻訳文と原文の対応関係の分析に用いられてきたパラレルコーパスの技術・方法論を英語学習者の議論文とその添削文に応用して、日本人英語学習者 (JPN) の causality の because/so の使用を習熟度別に分析した結果が報告された。研究方法として、NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) から JPN の議論文と英語母語話者 (NS) による添削文を別々に抽出したものを 3 段階の習熟度別に分類した。そして、JPN の議論文を NS の添削文と一文ずつ対応させたパラレルデータを作成して、ParaConc で検索を行った。検索方法として、(1) JPN の英語からある言語特徴を検索して、それに対応する NS の添削文の表現を調べる、(2) NS の添削文からある言語特徴を検索して、それに対応する JPN の英語を調べるという 2 つの方法を用いた。(1) では JPN が意図する自然な表現が検索でき、(2) では NS が使用する JPN が使用しない例が検索できる。例えば、(1) の検索で JPN の so が、添削文ではフォーマルな表現の therefore へ書き換えられ、初級レベルでは削除の対象になることが多いだけでなく、because へ変更されていた。(2) の方法で so を検索した結果、NS が so を使用するところで、JPN が and を使用している例が見られた。このことから学習者の原因と結果の因果関係の把握の仕方が NS と異なることが認められた。

従来のコーパスによる学習者英語の研究では、英語学習者の過少使用と過剰使用の表現を考察して、学習者英語の特徴を述べて、NS の過剰使用の表現から英語学習者が適切な英語を推測していた。一方、本研究で

は、JPN と NS の英語の対応関係を形成することによって、ある言語特徴を直接比較して、NS の自然な表現を示すことができる。さらに、元のコーパスで使用されている語が対応する添削文にない例を調べることによって、従来とは異なる分析が可能となった。

現状では、NICE (69,858 語) の中で習熟度が明記されているデータの一部 (21,378 語) のみをパラレルデータにしている。そのため、データサイズに関するフロアからの質問に対して、発表者から、今後の課題として全データに対応付けを行ってサイズを拡大することによって結果に一般性を与える方向性が示された。

中條清美 (日本大学)

### BNC サブコーパスの統語構造上の特徴分析

高橋 薫 (豊田工業高等専門学校)

白井翔悟 (プログラマー)

本発表では、話し言葉のレジスター間の統語構造上のバリエーションの特定に関して、特に言語スタイルの観点からの報告がなされた。コーパス言語学においては、言語スタイルは、語彙頻度あるいはコロケーションの生起率に注目して、ある文章がフォーマル/カジュアルであるといった特徴がどのように現れるかが分析される。本発表では、BNC のテキストが持つ属性 (社会階層、年齢、性別) に基づいてサブコーパスを構築した後、多変量解析によりタグ頻度の分析を行った。現れた尺度に言語学的な解釈を与える際には、これまで提唱されている言語スタイルのいずれかを当てはめ、まず、それらの特徴分析を行った。たとえば、最も vernacular (日常口語的かつ通語的) であるとされる BNC のサブコーパス、「age 0-14 の少女」においては、その典型語としての動詞群が特定された。さらに、統語的に他のサブコーパスと著しく異なった特徴を、それらの動詞群の文型の分析より明らかにすることを目指していることが報告された。

このような分析手法はそれぞれの動詞タグに続くタグの連鎖から文型等を特定するもので大変労力を要するものである。まだ、一部の動詞についてレジスター間の傾向分析がなされた程度であり、方法論の確立はこれからということで、今後のさらなる研究成果が期待される。発表の後半に、それらの解析プログラミングの紹介があり、統語分析の持つ困難な面と今後の課題について明らかにされた。

中條清美 (日本大学)

### ■シンポジウム

#### フリーオンラインコーパスの活用と英語学研究： BYU-Corpora を中心に

##### 「フリーオンラインコーパス概観」

司会 新井洋一 (中央大学)

まず、オンラインコーパスを、Web データをそのまま検索対象とする WaC (Web as Corpus) と、特定のコー

パスを Web 上で検索・コンコーダンス表示するもの (CoW: Corpus/Concordancer on the Web) の 2 種類に分類し、シンポジウムのテーマを後者の無料で利用できるものと定義づけた。その代表として Mark Davies による BYU-Corpora があり、それまでのコーパスの進化の流れを、Renouf (2007) を援用しながら明らかにした。次に、BYU-Corpora を含む主要なフリーオンラインコーパスの具体例と、それらの特徴について紹介した。

#### 「ANC との比較による BUY-COCA の活用と研究事例」

講師 林 裕 (関東学院大学)

BYU-COCA (Corpus of Contemporary American English) は、BYU-Corpora の中でも最大の 3 億 8500 万語からなるコーパスである。本発表ではまず、BNC と同じ 1 億語を目標としている ANC (American National Corpus) の現状 (現在 Second Release で 2200 万語) について説明した後、ANC と BYU-COCA のコーパスデザインの特徴や違い、特にジャンル区分の相違点を明らかにした。次に、非標準の日常語 ain't の頻度を複数のコーパスと比較し、BYU-COCA の会話ジャンルの特異性について指摘した。その他、ANC (DVD 版) の入手法や Xaira による検索の注意点、BYU-COCA と ANC の利用のし易さの違い、などについて解説した。最後に、研究事例として形容詞の配列順序の制約について取りあげ、既存研究を批判的に検討したあと、配列順序の決定に、「より確立した概念」と「より伝えたい情報」が関わっている可能性を提示した。用例の抽出にあたって、BYU-COCA のユーザーリスト機能が有効であることも例証した。

#### 「BYU-OED の特徴と BYU-OED を利用した研究事例」

講師 山崎 聡 (千葉商科大学)

まず BYU-OED (Oxford English Dictionary) の特徴について、OED2 の各種 CD-ROM 版 や OED Online と比較しながら、その優れた点、不便な点、そして注意点を明らかにした。次に BYU-OED を活用した研究事例として、複合前置詞句 according to を取り上げ、情報源を表す disjunct (Quirk et al.: 1985) 用法の発達過程について考察した。はじめに、OED2 における according to の定義中に、そもそも情報源を表すような定義づけがないことを指摘した後、BYU-OED によって抽出した 14 世紀以降の according to の引用例を検討し、adjunct 用法と disjunct 用法の区別の根拠とその必要性について論じた。そして結論として、disjunct 用法が、16 世紀の終わり頃発生したこと、目的語に (情報源となりうる) 権威を意味する NP を持つ according to 句が前置したのがきっかけであること、Swan (1988, 1991) が指摘した文副詞の発達の流れと一致すること、そして最近の文末に生起する傾向についても、Swan の文副詞の出現位置に関する通時的流れと基本的に一致すること

と、などを述べた。

## 「複数のオンライン版 BNC と BYU-BNC を活用した英語学研究」

講師 新井洋一 (中央大学)

本発表ではまず複数のオンライン版 BNC を紹介した後、BNCweb, BYU-BNC の登録方法, BYU-BNC の基本機能について解説した。BYU-BNC のジャンル別チャート表示機能の 1 例として、人称代名詞主語能動態挿入文と非人称主語受動態挿入文の検索結果を示し、運用ジャンルの面で、両者が対照関係をなすことを明らかにした。次に動詞 hold の特定のジャンルにおける意味と、辞書記述の問題を指摘した。また特殊表現 I goes の go の意味と特性について、BNCweb のプロファイル情報を活用しながらまとめた。最後に、accustomed to の補文選択の問題について、BYU-OED, BYU-TIME などと連携しながら、アメリカ英語における不定詞補文から動名詞補文への交替時期の特定を試みた後、イギリス英語でその交替が完全に起こっていない理由について可能性を考察した。同時に、accustomed to と同じ意味を持つ used to について、特に補文の意味上の主語の解釈の違いが構造上の違いにあることを論じた。

インターネット上でのコーパス研究をテーマに扱ったものとしては、すでに Hunt et al. (2007) があったが、さらに今年の 6 月に Anderson and Corbett (2009) が出版され、今回のシンポジウムにつながったように思う。大会当日は幸い多くの方々の参加を得た。質疑・コメントを含めて、積極的に参加していただいた方々に、心から御礼を申し上げます。

なお、BYU-OED については、学会の約 1 週間後から、“Due to concerns from Oxford University Press about licensing and copyright issues, the OED corpus is no longer available. Sorry . . . October 11, 2009” という案内が出され、現在は、BYU-Corpora のリストから削除されている。BYU-OED の持つ用例のソート機能や結果表示機能は本家のものより使いやすく、Davies の協力を得て、将来 OED Online に生かされることを願うばかりである。



## ハンドアウトのダウンロードサービス

第 34 回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 12 月 24 日までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂 (yasuishikawa@hotmail.com) まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。

なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

※以下、講師・発表者の敬称は略させていただきます。

1. 染谷泰正「英語語彙難易度解析プログラム」
2. 西原史暁「低頻度共起でのコロケーション強度を表す指標」
3. 小島ますみ「新しい lexical richness 指標の提案」
4. 田中省作・富浦洋一・安東奈穂子・柴田雅博「Web を源とした英語科学論文コーパスの構築」
5. 後藤隆昭「地域発信用英語コーパスの 4-gram 分析」
6. 三木 望「日本人英語学習者の CAUSALITY における習熟度」
7. 高橋 薫・白井翔悟「BNC サブコーパスの統語構造上の特徴分析」
8. 新井洋一「フリーオンラインコーパス案内」, 「複数のオンライン版 BNC と BYU-BNC を活用した英語学研究」
9. 林 裕「ANC との比較による BYU-COCA の活用と研究事例」
10. 山崎 聡「BYU-OED の特徴と BYU-OED を利用した研究事例」

## 英語コーパス学会第 35 回大会研究発表者募集

2010 年度春季大会 (第 35 回大会) は 4 月 24 日 (土) に兵庫県立大学神戸学園都市キャンパスで行われる運びとなりました。つきましては、発表を希望される方は、下記の要領に従って email で事務局宛にお申し込み下さい。

【分野】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】本学会員であること。

【発表方法】発表 20 分、質疑 10 分

【応募方法】冒頭に題名のみを記し、800-1200 字 (参考文献は別) にまとめ、メール添付ファイルで送付。メール本文に氏名 (ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、メールアドレス明記。

【応募締め切り】2010 年 1 月 5 日 (火) 必着

【採否決定】2010 年 1 月末日 (予定)

【問合せ】〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1  
徳島大学総合科学部 井上永幸研究室  
英語コーパス学会事務局  
email: inoue@ias.tokushima-u.ac.jp

## 会誌『英語コーパス研究』第 17 号について

『英語コーパス研究』第 17 号 (2010 年刊行) について、ご報告いたします。

2009 年 9 月投稿締め切りの本年の会誌への投稿数は、研究論文 12 点、研究ノート 2 点、シンポジウム論文 2 組でした。昨年の投稿数は、研究論文 5 点でしたので、本年は、昨年と比較して投稿数が大幅に増加しました。現在、論文査読委員により査読審査が行われております。

『英語コーパス研究』は例年 9 月末日が投稿締め切りです。本年度投稿に至らなかった論文など来年度の投稿募集へ向けにご検討をお願いいたします。研究論文、研究ノートのみならず、書評やコーパス紹介、ソフトウェアレビュー、実践報告なども受け付けております。多くの投稿をお待ちしております。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長  
塚本 聡 (日本大学)

## JAECS 東支部活動報告

東支部はさる 11 月 8 日 (日) 大東文化大学において、Adam Kilgarriff 氏をお招きして、コーパス検索システム Sketch Engine のツール講習会を実施しました (東支部と東京外国語大学 G-COE 共催)。約 30 名ほどの参加者があり、皆さん熱心に学んでいました。さらに 12 月 8 日 (火) にも、大東文化大学で Douglas Biber 氏を招いての東支部特別講演会を開催します。世界的に著名なコーパス言語学者がお二人も同時期にいらしてください、大変幸運なことと一同喜んでおります。

来年 2-3 月には、再度、コーパス・ツールの講習会を会員有志を講師に立てて実施する予定です。是非ご期待ください。

東支部支部長  
投野由紀夫 (東京外国語大学)

## 英語コーパス学会賞募集

第 9 回英語コーパス学会賞を募集いたします。学会賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

【対象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員 (個人またはグループ) とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績 (論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る) をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 同封の推薦理由書。2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局。

【応募期限】2010 年 3 月 31 日 (水)。

【発表】2010 年度秋季大会。

学会賞選考委員会委員長  
投野由紀夫 (東京外国語大学)

## 2010 年度の大会日程と開催校

第 35 回大会	4 月 24 日 (土)	兵庫県立大学
第 36 回大会	10 月 9 日 (土)	東京大学 (駒場キャンパス)

## 新入会員紹介 (11 月 13 日現在、S は学生)

伊澤宜仁	慶應義塾大学院 S
石塚美佳	東京工科大学
乾 展子	都立産業技術高等専門学校
片桐徳昭	北海道大学大学院 S
清久祥子	
高橋恭平	名古屋大学大学院 S
夏苺佐宜	立教大学
新實葉子	名古屋大学 S
野口博一	
松田早恵	摂南大学
森 英樹	岐阜聖徳学園大学

## 事務局から

### ◇会費納入のお願い

2009 年度会費 (一般 5,000 円、学生 3,000 円) を未納の方は、日本郵便にある払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。別途領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂 (〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学) までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2009 年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第 17 号は 2009 年度の会費を納入していただいた方のみ、送付いたします。また、2 年続けて会費未納の場合、Newsletter などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

### ◇メーリングリストについて

英語コーパス学会ではメーリングリストを使って会員の皆様の様々な情報交換に役立てていただいているところですが、最近、宛先不明でエラーが返ってくる例も増えています。会員の皆様方には、メールアドレス

スに変更が生じた場合、速やかに事務局宛ご連絡いただけますようお願い申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## FORUM

### ■新刊紹介

新井洋一 (中央大学)

araiguma@tamacc.chuo-u.ac.jp

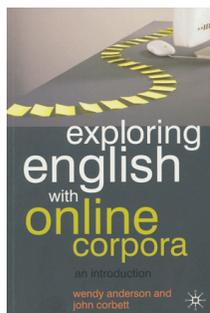
Anderson, W. and J. Corbett  
(2009) *Exploring English with  
Online Corpora: An Introduction*.  
Basingstoke: Palgrave Macmillan.  
205 pages.

£ 49.50 (hardcover)

ISBN: 978-0230551398

£ 16.99 (paperback)

ISBN: 978-0230551404



本書は、フリーオンラインコーパスを使いながら、英語学全般にわたる基本的なデータ収集・観察・分析の方法を解説した、実践的入門書である。今年の6月中旬に出版された。

著者のひとり J. Corbett は、Glasgow 大学英語学科の応用言語学の教授で、Scottish Corpus of Texts and Speech (SCOTS) と Corpus of Modern Scottish Writing プロジェクトの責任者である。W. Anderson は、2003 年に St. Andrews 大学で博士号を取得し、2004 年から 2008 年まで、Glasgow 大学で上記のプロジェクトの研究助手を務め、現在は Corbett と同じ英語学科の専任講師となっている。

本書は8章からなり、内容は、第1章がオンラインコーパスの紹介、第2章が基本的な統計処理の解説、中心となる第3章から第7章が、それぞれ語彙、文法、ディスコース、音声学、背景的情報に基づく分析 (contextualising)、そして最後の第8章がまとめとなっている。第7章の背景的情報とは、Spoken, Fiction, Academic といったジャンル情報や、性別、年齢、出身地等の著者・発話者に関するプロフィール情報のことである。

本書で取り上げている主要なオンラインコーパスは、今年の秋の大会のシンポジウムでも取りあげた BYU-Corpora (BNC, COCA, TIME) の3コーパスに、ふたりの著者が関わった SCOTS と Michigan Corpus of Academic Spoken English (MICASE) を加えた5コーパスである。これらの他にも、有益な複数のオンラインコーパス・コンコーダンサーがまとめて紹介されてい

て参考になる。いずれも無料で使えるものばかりでありがたい。

次に本書の構成の最大の特徴について述べたい。それは本書の各章に、TASK と名づけた演習課題が多数用意されていることである。演習課題には、まずどのサイトに行くべきか、どのように検索語・句・式を打ち込むべきか、検索結果をどのように判断すべきか、といった具合に、1つ1つの手順が細かく記されている。ただ、第1章の課題からいきなり文字のみによる手順説明が続くのはやや不親切で、具体的な画面画像付きの手順説明があってもよかつたであろう。授業のテキストとして使う際は、普通教室ではなく、最低でも教員が実際の手順をモニターに映して学生に見せられる環境が必要と思われる。演習課題の具体的処理・解決法は、演習課題のあとの本文部分で説明する体裁を基本的にとっているが、中には課題のみでそのまま終わっているケースも少なからず見受けられる。演習課題の内容を吟味し、全体としてもう少し減らしたり整理してもよかつたかもしれない。

内容面での最大の特徴は、音声コーパスを活用する章を、第6章として独立させたことである。中でもこの章で扱われている SCOTS は、構築・管理・運営面で本書の著者ふたりが深く関わっているものである。現在総語数が400万語で、80%が書き言葉テキスト、20%が話し言葉テキストから成る。年代的には、1945年以降の収録を目指しているが、現在のところ大多数のものは、1980年代以降のもので、特に話し言葉テキストは2000年以降録音されたものである。話し言葉の80万語については、テキストと音声・ビデオが連動していて、テキストの検索結果画面から音声を確認できる画期的な設計になっている。

この SCOTS を対象にした課題の分析例としては、たとえばつづり字 'r' の発音に関する例をあげることができよう。そこでは、イギリスで生まれ育った女性が、スコットランドに移住しても、non-rhotic の特徴を維持している例を観察できる。具体的には、語尾やポーズ・子音の前では /r/ を発音しない (e.g. *er*, *garden*) が、次の単語の語頭が母音のときには /r/ を発音している (e.g. ... *there is* ..., ... *sure. It was* ...), という例である。普通の音声学のテキストに付属の CD には、自然な発話はなかなか収められていないが、SCOTS には自然な発話文が収められており、自分の耳で体験したり確認することが可能である。

SCOTS を利用する際は、利用者がスコットランド特有の語彙 (*fit*, *outwith*, *wee*) や、独特のスコットランド訛りにある程度慣れる必要がある。スコットランド訛りに関わる課題としては、スコットランドで母親が子供に語りかける際によく聴かれる表現 *What / Pitt / How about / about ... ?* の、疑問詞と前置詞の組み合わせ種類の頻度差を調べるものがある。なお、弱形、強形、同化、消失などの、音声学の基本現象の課題演習もきちんと盛り込まれている。一通り課題をやり終え

ると、スコットランド訛りの英語について、理解をかなり深められるだろう。

第6章以外では、Popper (1959) の白鳥の例え話をあげながらの反証可能性に関する解説 (p. 5), Stubbs (1996) の *cause* の目的語の意味特性に関する指摘 (p. 60), Stenström (1994) などによる対話文における *adjacency pairs* の具体例 (p. 112) など、現在でも重要な英語学のトピックの要点がさりげなく提示されている。さらに、*seedy*, *tome*, *rugged*, *totally* などの語の意味や用法、*a matter of weeks*, *blame for EFFECT / on CAUSE* などのイタリック体部分の分析、*assume* を使った仮定表現とそのあとのディスコース展開 '*hypothesis + affirmation / denial*' (p. 120), またBNCのXML版の具体的問題点 (p. 53) など、幅広い内容について、新鮮で丁寧な解説がなされている。

各章末には、さらに読み進めるための参考文献が、また巻末には、精選された複数のオンラインコーパスリスト (pp. 183-187) と、アルファベット順の用語解

説リスト (pp. 193-200) がきちんと整理されていて重宝である。前半で本書の構成面について若干批判したが、それは本書の長所に比べれば、実を取るに足りないことに過ぎない。現在のネット空間には、無数のリンクが際限なく張られたサイトが横行し、コーパスに関する情報が無意味に溢れている。本書はそのような中であって、自分自身でテーマを見つけ深めるためには、何を選び、どのように使い、どんな結果を出せばよいのか、誠実なアドバイスを与えてくれる1冊である。

#### 参考文献

- Popper, K. (1959) *The Logic of Science Discovery*. London: Hutchinson.
- Stenström, A.-B. (1994) *An Introduction to Spoken Interaction*. Harlow: Longman.
- Stubbs, M. (1996) *Text and Corpus Analysis*. Oxford: Blackwell.